

HATOプロジェクト先導的実践プログラム部門 「へき地・小規模校教育に関するプロジェクト」 平成28年度 へき地・小規模校教育フォーラム



総合司会：戸田 竜也

（へき地教育研究支援部門 釧路校センター員）

北海道教育大学教員養成開発連携センター長の阿部修よりご挨拶を申し上げます。

開会挨拶

阿部 修

（北海道教育大学 教員養成開発連携センター長）

皆さん、こんにちは。全国各地より、遠路はるばるお越し頂きまして、誠にありがとうございます。今ご紹介頂きました、阿部と申します。よろしくお願いいたします。



最近、日本国内では学校の統廃合が進みました。しかし、全国的に見ますと、複式学級、或いは小規模学校がまだ数多く存在していると思います。ここにおられる若い方々は、これから先生を目指してと思いますが、あなた方が先生になったときに、初任地が小規模校、或いはへき地校であるという可能性はそれほど高くないのではないかと思います。

しかし、40年近いキャリアの中でそういった小規模校、或いはへき地校に赴任するという可能性はゼロではないし、結構高いのではないかと考えております。

しかし、残念ながら大学の教育の中では、普通に行われる教育実習は、いわゆる都市部の大規模校で実習を行いますので、小規模校における児童、生徒指導の在り方、或いは個に応じた教育というのが、必ずしも十分に行われているわけではありません。そういった力がなかなか付かないのではないかと考えております。

一方、北海道、皆さんご存知でしょうか。非常に広い土地でして、日本の中で香川県が一番小さく、45入るんだそうです。その中にいる人間の数は、香川県の5つ分です。ですから、いかに人口密度が低い土地柄かというのが分かって頂けるとと思います。

そのように人口密度が低いんですけども、北海道教育大学の5つのキャンパスがある都市に、実は人口が集中しております。或いは札幌近郊の市に人口が集中しております。ですから、ほとんどはそういう都市部に人口が集中してまして、それ以外の所は非常に過疎化が進んでおります。北海道にはおよそ180の自治体があるんですけども、その8割が過疎に指定されているそうです。

そういった土地柄ですから、北海道教育大学は歴史的に見まして、小規模校・へき地校の実習、或いは研究が進んでいる、そういう大学となっております。

本学の学長は、このへき地・小規模校教育、或いはへき地・小規模校の研究を本学の特色として位置付けておりまして、これをもって全国に打って出ようというふうに聞いております。

少し話は変わるんですけども、教員養成改革を行おうとして取り組んでいる全国的な試みの中に、HATOプロジェクトというのがございます。HATOと言いますのは、教員養成単科大学の大きい方の4つの大学、北海道教育大学、愛知教育大学、東京学芸大学、それに大阪教育大学を加えた、その頭文字を合わせてHATOと呼んでいますが、そのプロジェクトでそれぞれの大学が力を入れている取り組み、或いは特色のある取り組みを持ち寄りまして、それ

を全国展開して、全国の教員養成を改革していこうという
ような取り組みとなっております。

その中には細かく言いますと、16のプロジェクトがあり
ます。このへき地・小規模校教育プロジェクトは、その中
の1つとして位置付けられています。このプロジェクト
は他のプロジェクトとかなり違う点がありまして、主体
がここにお集まりのように、学生がかなり重要な割合とな
っているのが、他の15のプロジェクトに比べて大きな特徴に
なっております。そのHATOプロジェクトの中に位置付
けられたこともありまして、HATOの4つの大学でこう
いったことに興味を持ち、研究を行っている先生方にもお
集まり頂きまして、ディスカッションをして頂き、それで
徐々に発展してきたという経緯がございます。

本日はさらに、各地にも広まりをみせておりまして、和
歌山大学からも参加頂いているということでございます。
本日はその若い方々が小規模校、或いはへき地校実習を通
して、どういうことを学んだかを発表して頂いて、より良
い教師を目指して指導法の開発に繋げて頂きたいというふ
うに思っています。

本日は中富良野町立旭中小学校の田中和敏校長先生、そ
れから北海道立教育研究所、企画・研修部の中澤部長にも
お越し頂きまして、講評を頂くこととなっております。本
日限られた時間ではございますけれども、実りの多いフォー
ラムになってくれるよう願っております。今日一日よろし
くお願いします。

総司会：戸田

それでは、既にこちらのプロジェクトの方に出ており
ますけれども、1つ目のプログラムです。

HATOプロジェクト基調報告ということで、北海道教育
大学、学校・地域教育研究支援センター、へき地教育研究
支援部門、部門長の川前あゆみより、ご報告致します。

基調報告

川前あゆみ（へき地教育研究支援部門 部門長）

皆さん、こんにちは。へき地・小規模校教育に関するプ
ロジェクト責任者の北海道教育大学の川前と申します。短
い時間でこれまでのこのプロジェクトの取り組みについて、
ご説明させて頂くのが1つと、このフォーラムの位置付け
についても簡単に報告させて頂きたいと思えます。

これまで平成25年から29年3月まで、この間、北海道教
育大学、愛知教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学の関
係する共同研究者の先生方と共に、このへき地・小規模校
教育に関するプロジェクトを進めて参りました。その成果
としては、へき地・複式小規模校教育が都市部大規模校に
も応用出来る可能性があるということを確認いたしました。
そのプロジェクトで開発致しました教材を使って、各連携
大学に出前授業をさせて頂いております。その教材につい
ては、中学年の算数の学年別指導、高学年の社会科の学年
別指導ということで、複式学級における先生の色んな指導

の工夫についてビデオ、或いは手引書を用いながら教員養
成で学ぶ学生の皆さんに、より理解が深まりやすくなるこ
とを目指して、教材開発と出前授業に努めてきた数年間で
した。

今年度、HATO連携大学への出前授業の中から感想を
まとめてみると、大きく3点になります。1つ目が小規模
校の実態を知る。2つ目が小規模校化していく中で日本の
教育課題に気付く。3点目が学生自身の教職意識を喚起
するものである。ということが、感想文の中からもたくさん
出て参りました。

本学の教員養成課程におけるへき地小規模校に関わる実
習の実績ということで、今日前半のところで北教大の6名
の実習生の皆さんが、それぞれの地域で1週間、もしくは
2週間の実習をさせて頂いた成果発表を実習生自身の言葉
で発表頂きます。大学としてはこの実習の目的として、大
きく3点挙げております。1つ目がへき地・小規模校にお
ける授業方法、生徒指導方法の習得です。2つ目がへき地・
小規模校の基盤である地域理解です。この背景には、学生
の出身地は都市部であることが多いことが挙げられており
ます。3つ目が学校教育における地域連携・融合のあり方
の観察・理解です。この3つの点については、こうしたへ
き地・小規模校実習の目的が、実は学生の小規模校での力
量を上げるだけではなくて、少人数指導だとか、地域理解、
地域と学校等の関係については、都市部の学校においても
必要とされる力量だと言われております。

本学ではこれまで、教員養成3キャンパスで、毎年120～
130名の学生達が実習に参加している実績があります。今年
度については北海道179の市町村がございますが、そのうち
の26の市町村で55校の学校に協力頂きました。実習生は合
計で124名になります。本当に全国各地の学校の先生方にご
協力頂きながら、また自治体にも教育委員会にもご理解頂
きながら、推進しているところです。

これまでHATOプロジェクトのへき地・小規模校のプ
ロジェクトでは、教員養成段階における多様な実習を通じ
た、教員養成モデル構築を目指して、各大学からそれぞれ
の大学の地域に応じた、或いは大学の必要性に応じた様々
な実習の学びということで、ここ数年、交流をさせて頂い
ております。本日は北海道教育大学からは、へき地校体験
実習に参加した、学部の2年生から4年生です。愛知教育
大学教職大学院からは、大学院1年生の皆さんに地域フィ
ールド実習について発表して頂きます。東京学芸大学からは、
島しょにおける実習、教育環境サポート校における学び、
小規模校学校ボランティアについて、学部1年生から4年
生の皆さんに発表頂きます。大阪教育大学については、遠
隔地実習として、学部の2年生の皆さんに発表頂きます。
更に今年度は、和歌山大学、豊田先生にもご協力頂きなが
ら、へき地・小規模校実習の取り組みについて、こちらの
レジュメにありますように、小規模校活性化支援事業、へ
き地・複式教育実習、小規模校実習など、へき地・複式実
習を本格的に取り組んでいる大学として、今回お声掛けを

して参加頂きました。ありがとうございます。詳細については豊田先生の方から、この綴りの資料の4ページ目にレジュメ資料の、提供を頂きましたので、後でご覧頂ければと思っております。

さらに、へき地・小規模校での実習を通じた教員養成モデルの構築として、大きく3つ取り組んで参ってるところです。1つ目がへき地校体験実習から捉える教育の原点です。小規模校での実習を通して教育の原点に気付くということが、毎年実習生の報告からも挙げられています。2つ目には各大学の多様な実習です。これが多様な教育実習の導入の意義として捉えていくということでは、多様な実習を経験することで、学校を相対化して捉える力を獲得していくことに、繋がっていきます。3つ目にはこれからの教員に求められる教員養成の質保証です。大きくここでは2つ挙げられておりますが、冒頭に申し上げましたように、へき地・複式教育から様々な観点、知る方法が見出せるということ。改めて、2つ目にはへき地・複式小規模校の学習活動、或いは教育活動が都市部、大規模校での学習活動にも応用出来るということを確認して参りました。

今後、本プロジェクトではこれを全国の大学に、どういうふうに普及していくか、或いは小規模校化していく全国の現場の先生方に、どういうふうに関連していくかということが求められているところです。ここには昨年度の全国の指定校数を都道府県上位から挙げておりますが、ご覧の通り、鹿児島、沖縄、長崎については島が多いという県になります。北海道は本当に広大な地域に、たくさんのへき地・小規模校がたくさん今でもあります。そういった中で今日のフォーラムでは、本当に短い時間ではあるんですけども、5つの大学から16本の発表、20人の実習生の皆さんに登壇頂く予定です。1つの大学による学生の実習成果発表を受けて、教員養成に求められる取り組みについて、参加者の皆さんも様々な立場の方が今日いらっしゃってますので、それぞれの立場から、今後の取り組みを生かす交流の場としていただきたいと思います。

先程、司会の方からもご案内ありましたように、17時10分からは交流の場として、主に学生報告Ⅱの後半の発表を受けて、北教大以外の4つの大学の意見交流の時間をA、B、C、Dのブースに分けて、交流を深めていく時間にしたいというふうに考えております。短い時間ではありますけれども、お互い学生さんもたくさんおりますし、先生方もたくさんおりますので、お互いの立場で様々な意見交換だったり、交流をして頂ける時間になればというふうに思っております。短い時間ではありますけれども、今日一日、どうぞよろしくお願い致します。

学生による報告Ⅰ

司会：渥美 伸彦（へき地教育研究支援部門 旭川校センター一員）

それでは続きまして、学生による報告Ⅰということで進めさせていただきます。

私は、へき地教育研究支援部門、旭川校センター員で旭川校の教員養成課程国語教育専攻の渥美と申します。どうぞよろしくお願い致します。座って進行させていただきます。

それでは皆様の資料に基づきながら、6名の方々の学生に発表して頂こうかと思っております。正味発表時間8分、全体2分ということで、お1人10分以内で進めて頂きたいと思っております。発表始まりまして、6分経ちましたら1鈴、7分経ったら2鈴鳴らします。定刻になったら3鈴を鳴らしますので、発表の方々は時間を厳守でお願い致します。発表が全て終わりましたら、まとめて全体質疑15分程度行います。皆様のご協力をお願い致します。

最後全て含めまして講評と致しまして、先程も紹介させて頂きましたが、全国へき地教育研究連盟の会長を務めていらっしゃいます、中富良野町立旭中小学校、田中和敏校長先生に10分程度で講評を頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

それでは早速1番目、へき地校体験実習Ⅰ、札幌校の2年生、田畑麻理さんです。士別市立糸魚小学校で実習をしてくれました。報告をよろしくお願い致します。

学生による報告Ⅰ

「へき地校体験実習Ⅰ」

（実習校：士別市立糸魚小学校）

北海道教育大学 札幌校：2年 田畑 麻理



北海道教育大学札幌校、言語社会教育専攻2年目、田畑と申します。私は士別市立糸魚小学校に実習に行かせて頂きました。私がへき地校体験実習を希望した理由は、自分自身が将来へき地校で教師として働きたいと考えているためです。私は小中学生の時、実際にへき地に住んでいて、その学校に通ってました。そのような経験から、私自身が受けてきた教育を今度は私が教師になって、子ども達に指導したいと考えたためです。そのため、へき地校ならではの教育の在り方を客観的に見ることで、今日のへき地校の教育の在り方を生で感じ、見て、学びたいと思い希望しました。

士別市糸魚小学校は、朝日町というところにあり、札幌から3時間、更に士別市街から約30分で着きます。学級編制はスライドの通りになっています。実習の流れはこのようになっています。全部で7日間の実習でした。宿泊は朝

日山村研修センターというところに泊まりました。ご飯を用意してくださるところだったので、実習に集中することが出来ました。

次に、糸魚小学校の児童の様子をお話したいと思います。写真は校舎内の様子です。とても開放的な校舎で、伸び伸びと子ども達が生活をしている様子が見られました。また学年を越えて、皆で協力し合うという場面が非常に多く見られました。例えば、校内の掃除は縦割り班で活動しており、また糸魚小学校では、学校の横にある畑で農園活動があるのですが、その活動も調理したい料理ごとに班が組まれ、作業をしていました。このような活動があることで、高学年は低学年に作業や仕事を教える活動を通して、高学年の自覚や責任感が芽生えていくのではないかと感じました。そのため、学校生活を送っている中でも端々に低学年を気遣い、声掛けをする高学年の姿が見られ、思いやりの心が育っている子どもが多いと感じました。

農園活動を見て感じたことは、地域と学校の繋がりが非常に密接であるということです。町の農家さんが畑の先生として、野菜の育て方や収穫の指導をしています。自分達が調理で使うために必要な量以外の野菜は町のお祭り、「じゃんじゃんジュビリー」に子ども達が出店をし、販売を行っていました。その、「じゃんじゃんジュビリー」というお祭りが実習の最終日でした。子ども達がお金のやり取りや売り子を実際に体験して、野菜を売っている姿です。また、地域の大人達の様子を見て、地域の方々との一体感というものを実感しました。大人達全員が子ども達を見守って育てているという印象を受け、また、この話を教頭先生にもお話をしたところ、教頭先生からも地域の方々から子ども達を自分の子どものように、本当に可愛がってくれる方が多いというお話もありました。

次に、授業観察についてお話したいと思います。全学年の授業を見学させて頂きましたが、特に3・4年の複式学級が印象に残りました。算数の授業を見学したのですが、担任の先生が子ども達を指導するために何度もわたりをしており、大学の講義では、わたりを固定化した授業を想定して勉強をしていたため、その人が気になり質問をしにきました。何度もわたる理由としましては、3・4年生の中で、学力差が非常に大きいという点にあるというお話を受けました。事前に先生が考えていた内容で時間が足りて余ってしまう児童もいれば、時間が足りずに困る児童もいることから、全体を見ながら子ども達の実態に合わせてわたるというやり方を取っているということ。また、ずっと担任がいない時間があると、不安になってしまう児童がいることや、担任が声を掛けるだけであきらめてしまった問題、解けないと思った問題をもう一度考えてみようと思えるきっかけになるのではないかと考え、わたる回数を増やして声掛けを行っているというお話をして下さいました。

大学の講義でわたり、ずらしの知識を持つことは出来ていたのですが、それは具体的に私自身の中に理解されていたのではなく、漠然としているものであったと気が付きま

した。実際に複式の授業を客観的に見学をさせて頂いたことで、わたるタイミングやずらしも型が決まっていて、固定化されているものではなく、目の前の子ども達の実態を掴み、理解をして、その子ども達に合うような臨機応変な態度を取って指導していくことが重要なのだと感じました。

9月2日には教壇実習をさせて頂きました。私が社会科を専攻しているということで、配属学級の5年生で社会科の自動車を作る工業という単元の第3時を授業させて頂きました。本時の目標、展開はスライドの通りです。指導教諭の方が社会科のデジタル教科書のデータを持っていらっしやだったので、そのデータをお借りして、映像を見ながら授業を進めていきました。指導の目標は児童の様子を見つづ発問をし、児童の言葉を拾っていく。時間配分に気を付け、本時で児童に理解してもらいたい点をしっかり教えるという2つを立て、教壇実習に臨みました。

実際に授業をしてみると、反省点が非常に多くありました。まず初めての教壇実習で非常に緊張していたために、学習問題を書き間違えるという、単純なミスをしてしまいました。授業後、少し戸惑ったという声があり、申し訳なかったと思っています。児童の様子を落ち着いてみることに主に前半は全く出来ていなくて、後半になり机間指導をやつとするということが出来たのですが、こういうふうな指導をしようと予定して望んでいましたが、実際に出来たのはわずかでした。

教壇実習を通して見つけた課題としては、まず、もっと視野を広く持つということです。子ども達を気遣う時間をもっと増やさなければ、子ども達のための授業を展開することは出来ないと感じました。また、自分の言葉遣いにも気を付けなければならないと思いました。この言葉遣いに関しては、授業を見て下さった指導教諭、校長先生からご指摘を頂き、感じたことです。頂いたご指摘はスライドの通りです。言い切りの表現を使うことで児童自身が何をすべきか明確になり、学習をスムーズに進められるということ。また、児童の発言からまとめを作るときは、誰々さんの言葉を使います等、一言あると良いということをお話頂きました。これは子ども達の依存感情を高めることに繋がるのではないかと考えました。このように教師の言葉、態度一つが子ども達の学習環境を作る一要因になると、非常に強く感じました。

授業後、5年生の子ども達に私の授業の感想を簡単に書いてもらったものが写真です。少し見づらいのですが、子ども達は映像を見ながら勉強できて、楽しく学べたという感想を持ってくれたようです。

次に、当初立てていた実習課題のテーマを振り返り、私が7日間の実習で感じたこと、考えたことをお話します。挙げた課題は2つありまして、1点目に関しては、まず日々の先生方と子ども達の様子から1人当りにかける時間を多く確保出来るために、指導も細やかに出来るということ。児童1人ひとりに対する理解が深く、それが自分が受け持っている学級だけではなく、他の学級の子ども達についても

同じであるということが分かりました。また、地域と学校の関わり方については、前のスライドでお話した通りなのですが、へき地では学校内だけで子ども達を教育しているというよりも、地域の大人達、子どもと関わる全ての人が見守って、育てているという印象を受けました。

今後の自分自身の課題としましては、教壇実習で感じたように、まず広い視野を持てるようにすることと、教師としての立ち振る舞い、在り方を考え、行動を出来るようにすることです。また、今後へき地の特性を生かした授業や、学校生活作りは何が出来るのか、さらに深く考え学べていけたらと思っています。

最後に教職への意欲、期待をお話します。今回へき地校体験実習に行くことが出来、実際の教育現場を生で7日間見て、子ども達と向き合う経験が出来て、本当に良かったと感じています。さらに、強く教師になりたいという思いになりました。今回の実習の経験をもとに、自分のなりたい教師像を固め、その実現に向け、行動出来たらと思っています。そのために、さらに学生のうちに教育現場に関わっていきたくため、来年度は教育フィールド研究に参加し、勉強出来たらと思っています。本当に実りの多い、有意義な実習にすることが出来ました。以上で私の発表を終わりにさせて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

田畑さんありがとうございました。

それでは早速ですが、続きまして旭川校2年、西田えりさんです。富良野市立麓郷小中学校での実習報告をよろしくお願い致します。

「へき地校体験実習Ⅰ」

(実習校：富良野市立麓郷小中学校)

北海道教育大学 旭川校：2年 西田 えり



皆さんこんにちは。北海道教育大学旭川校2年目、教育発達専攻の西田えりと申します。よろしくお願い致します。では早速初めさせて頂きたいと思います。

私が行かせて頂いたのは、富良野市立麓郷小中学校という学校です。まずは、実習に参加した動機についてお話したいと思います。1年生の時に参加したへき地教育論とい

う授業で、自分がへき地について何も知らないことばかりに驚かされました。実際私は、ずらし、わたりというものを聞いたこともなく、大規模校で私はずっと育ってきたので、授業では新しいことばかりでした。そしてこのままへき地校に赴任したら、自分はやっていけるのかなという不安や、こんな貴重な体験は他ではもう出来る機会はないなという気持ち。そして長期休業を使って、子ども達と生活等を共に出来る様な機会を大切にしたいと思い、参加することにしました。

富良野市立麓郷小中学校について説明させて頂きたいと思います。この学校の特色としては小中学校なので、年の差が最大で10歳程離れている子ども達が学校で生活しております。この写真のような自然に囲まれた、時間がゆっくりと過ぎるような環境の中で、まるで家族のように生活する子ども達がとても印象的で、へき地の特性を感じることが出来ました。そして教員編成がこのようになっております。私はこの5・6年生に配属されました。

子ども達との毎日の思い出について少し紹介したいと思います。初日は自分の担当学級に配属され、オリエンテーションを行った後、プール授業があったので子ども達とプールに入り、水泳の授業を行いました。生徒達はこちらが緊張していたんですけど、元から持っている優しさですとか、純朴さ、そして明るさで私達をすぐに受け入れてくれました。そして翌日からは、より多くの時間を生徒達と接して学ぼうと思い、早めに登校し、子ども達を出迎え、放課後は一緒に少年団にも取り組みました。「ことぶき大学」という地域の高齢者の方々が学校訪問をした際には、先生方の授業や生徒指導だけでなく校務のお仕事ですとか、生徒が帰ってからも会場設営等を手伝っていくことで、教師という仕事の今まで見えていなかった大変さや、仕事内容を知ることが出来ました。後半2日間におきましては、すでに別れが寂しくなってきたのですが、このネームの写真は行ったときは、殺風景なこういう感じの名前だけが書いてあるネームだったんですが、生徒達が外に行ったらひまわりの種を取ってきてくれたり、お家で作っているトンボ玉を私にプレゼントしてくれたり、家庭科が得意な子は、こういうふうに西田先生というワッペンを作ってくれたり、毎日生徒達が自分で出来る範囲で工夫を凝らしてプレゼントしてくれて、今となっては私の宝物となっています。これを見れば生徒達の顔ですとか、思い出だけでなく、これを見て頑張ろうという教師になるための励みになっております。

最終日に行った教壇実習について説明したいと思います。行った授業は5・6年生複式のずらし、わたりを用いた授業でした。担当の先生に、単式でも複式でもいいと言われたのですが、自分のクラスの子ども皆に教えたいという気持ち、そして挑戦してみたいという気持ちで複式授業を行いました。単元はこのようになっております。私にとってこの教壇実習は初めての連続でした。そもそも45分間の授業を生徒相手に1人で行うことも初めてでしたし、目の前にいる生徒達を考えながら作る指導案作りも初めての体験

でした。そして何より苦労したのは、わたり、ずらしを用いた指導案を作り、授業を行うことです。3日目までに参観してきた先生方の授業を参考に頑張りました。時間配分だけでなく、自分が付けないうきの課題提示等、工夫すべき点がとても多かったです。満を持しての当日でしたが、当日生徒が1人欠席してしまい、5・6年生それぞれ創作文の授業だったので、話し合い等の時間を多く設けていたのですが、1人ずつ書く、こういう写真みたいになってしまったので、相談の時間を設けることが出来ず、自分が授業をやりながら生徒の声を拾って相談を行ったり、ヒントを出すなど、臨機応変さが求められました。生徒達の声の一つ一つ拾うことが出来て、苦手やつまずきに気付くという、へき地校ならではのメリットも感じる事が出来たのですが、生徒からの意見が出にくかったり、どうしても教師の思うように誘導してしまう、へき地校のデメリットも感じる事が出来ました。これは実際に私が作った指導案になっております。教壇実習を行って、これは実際の授業風景です。なるべく子ども達に寄り添って、声を拾いながら授業を行うことを心掛けました。

感想としましては、先程も述べたような複式ならではのメリット、デメリットを体感出来たこと、臨機応変な対応をするためには教材研究が大切だということ。そして準備の時、先生に言われたようにへき地校でも通常学校でも努力の量ですとか、準備の量を変えてはいけないということも学ばせて頂きました。課題として、生徒が分からないときにどう声を掛けてあげるか、自分でもっと課題解決のために考えることが出来るのかという声掛けを学びたいと思っております。

今回の実習に行き、私が学んだこととしまして、まず自分が教師になりたいと思う気持ちがより一層強くなりました。日に日に生徒達への愛情が大きくなると共に、教師という仕事の責任感を感じるようになりました。そしてこの生徒達のために、自分には何が出来るのだろうかと考えようになり、子ども達のために努力出来ることの楽しさや、幸せを知ることが出来ました。教師との出会いや教師からの言葉などが、生徒達の人生や未来に影響することは、自分も小学生だった頃の経験で感じましたが、今回の実習で、教師が子ども達から与えてもらえるものの多さを感じる事が出来ました。子ども達を見て自分で気付いていなかった自分の一面を知ることや、純朴な子ども達の優しい気持ちや心遣い、そして教壇に立って生徒達に見られるたびに、先生としての責任感を覚えました。特にこの実習では短い期間の中でしたが、この生徒達との出会いによって、これから教師を志す途中や、教師になることが出来、落ち込んだことがあった時でもまた頑張ろうと思ひ、向上心を持って努力する励みになることが出来たと思っております。教師は確かに仕事量も多いですし、責任もある大変な仕事であるということは、現場で実際に見て体感してきました。しかし、それは自分の教え子達の人生に関わる大切な仕事であると思うと、教師として働いて生徒達の未来がより良

いものになる手助けが出来ること、子ども達の成長に携わることを忘れず、仕事にも子どもにも愛情を持って努力すべきだと思ひました。へき地の特性や授業実践能力だけでなく、今回の実践では教師という仕事の魅力と責任、そして子ども達の尊さという、教育の原点に改めて気付かされ、学ぶことが出来る実習だったと思っております。これで発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

西田さん、ありがとうございました。

それでは続きまして、旭川校の2年生、工藤彩美さん、よろしくお祈りします。工藤さんは富良野市立山部中学校で実習をしました。

「へき地校体験実習Ⅰ」

(実習校：富良野市立山部中学校)

北海道教育大学 旭川校：2年 工藤 彩美



皆さん、こんにちは。私は北海道教育大学旭川校、英語教育専攻2年目の工藤彩美と申します。私は今回1週間の間、富良野市立山部中学校に行かせて頂きました。初めに、何故私がこのへき地校体験実習に参加しようとしたのかについてお話したいと思います。

1点目は小規模校へ関心があり、へき地教育論の講義で学んだことを生かしたいと思ったからです。私は小学校、中学校共に標準規模学校の出身であるため、小規模校への理解を深めたいと思ひました。2点目は来年の本実習に向けて、今の自分に出来ること、足りない部分を知りたいと思ったからです。いざ来年の本実習の時に教壇に立つのではなく、本実習まで後1年あるこの時期に実習に行くことで、来年に繋がる発見や学びが出来ると思ひました。

次に実習の目標についてお話します。私は次の3点を目標に心掛けました。1つ目は、子どもの理解や習熟の程度に配慮した指導に関してです。2つ目は、授業時間以外での休み時間や係活動についての子供達の関わり方についてです。3つ目に、教師として教育活動を続けていく上で大切な点に関してです。実際に学校現場で働いている先生方との関わりの中で、教師のあるべき姿というものについて、自分なりに考えを深めていきたいと思ひました。授業の様子を観察して、山部中学校の生徒は学習に真剣に取

り組む生徒が非常に多いと感じました。授業の中で分からないことがあれば積極的に質問し、人前で自分の意見を発表することに物怖じせず、授業への参加に非常に積極的な印象を受けました。そして全校音楽の時に、1・2年の生徒と音楽の話をしたり、元合唱部であるので少しアドバイスをしたりと、3学年の生徒達と交流することが出来て、とても有意義な時間となりました。私は3年生の担当だったので、この1週間でたくさん交流を深めることが出来たのは、3年生の皆さんでした。最初は生徒の方から話し掛けてきてくれることは少なかったのですが、自分から積極的に話し掛けていき、コミュニケーションをとろうという姿勢でいました。次第に生徒達も心を許してくれて、話し掛けてきてくれるようになり、非常に嬉しかったです。最終日にはかなり打ち解けてくれたので、別れがとても寂しく感じました。

小規模学級の授業を参観して、次の2点を発見することが出来ました。ちなみに山部中学校では、わたり、ずらしの授業は行われていませんでした。1つ目は、生徒1人ひとりに目が行き届くことで、きめ細やかな授業が行われやすいということです。山部中学校は1年生4人、2年生15人、3年生10人という人数編成で、1クラスあたりの生徒数が少ないので、教師は生徒1人ひとりの学習の様子を観察することが大切だということを知ることが出来ました。2つ目は、生徒1人ひとりの得意、不得意な部分を把握することが出来るということです。授業の参観を通して、教師は授業の理解が行き届いていない生徒に個別に対応している様子も見られ、これも小規模校ならではの利点であるなど感じました。

このへき地校体験実習において、私の中で一番印象強い体験として残っているのが教壇実習です。私にとって初めての教壇実習であり、授業が始まる前は非常に緊張していました。しかし終わった後は達成感に満ち溢れていて、経験して良かったなど強く感じる事が出来ました。

この教壇実習を通じて学んだことが2点あります。1つ目は、生徒に気付かせる授業作りが大切だということです。教師がただ一方的に知識や答えを教える授業だと、生徒は何も成長することが出来ません。生徒が自分自身で発見したり、気付くことが出来る授業であると、生徒の学習意欲も増すと感じました。2つ目は、授業は教師と生徒で作り上げるものだという事です。授業の中で生徒に助けられる場面というのは非常に多く、生徒による発言や発見によって、授業がいい流れに進むこともあります。授業を行う上で生徒の存在というものは非常に大きなものであるなどというのを感じました。教師の仕事はただ授業を行うだけでなく、本当にたくさんの仕事があるのだということを先生方の姿を見て感じさせられました。授業をするための準備をしなきゃいけない中で、生徒との時間を大切にしている先生方を見て、素晴らしいことだなと感じました。給食の時間や清掃時間も勿論指導の時間であるため、教師に休息の時間はないんだなどというのを感じさせられました。しかし、

これらの時間も全て子ども達の成長にとって欠かせないものだと思います。忙しさを理由にして生徒との時間を設けないのではなく、生徒達と触れ合う時間を大切にすることでいじめ等、教育問題の改善に繋がるかもしれないと思いました。教師にとって授業を行うことが一番の仕事であると感じました。ですが、授業以外の時間から学ばされるということも多いはずで、行事を通して学年が上がるにつれて、生徒が心も体も大きく成長していくことを近くで見ることが出来るのは教師であります。教師は素晴らしい職業だと感じました。

次に実習を通して感じたこと、学んだことについてお話しします。教師になるということは、自分が思っている以上の覚悟が必要なのだということを感じさせられました。教師の仕事は想像以上に多く、しかし時間は限られているので、精神力も忍耐力も求められるのだということを知りました。そして、今回の実習は1人では乗り越えることは出来なかったと感じています。緊張の実習生活、初めての教壇実習の授業準備等、大変なこともたくさんあり、やはり仲間がいるということは大きな支えになるなどということを感じました。

今回の1週間の実習を通して、改善しなければいけない課題もいくつか発見しました。初めに教壇実習を通して発見したことは授業作りについての知識不足です。2つ目は実習全体を通して発見したことです。それは生徒への効果的な声掛けの種類をもっと身に付けなければいけないことです。先程お話ししたことを課題に、次のことを重点的に学んでいきたいと思っています。1つ目は、よりよい授業のための知識を身に付けるということです。解り易く、かつ楽しい英語の授業の作り方。そして授業が終わった後に、生徒が自分自身の成長を感じる事が出来る授業というのは、理想的であるのではないかと感じる事が出来ました。そして英語力の向上です。英語教師は生徒にとって、英語話者の見本とならなければいけないということを感じる事が出来ました。3つ目はボランティア活動を通して、子ども達と関わる機会を増やすということです。以前からボランティアには参加していたのですが、これからも引き続き行っていき、子ども達と触れ合うことで、いざ実習にいつでも物怖じすることは無いんじゃないかなと感じたので、続けて行きたいと思っています。

5日間という短い期間でしたが、多くのことを学び、自分自身の成長を感じる事が出来ました。そして、このような貴重な経験をさせて頂いたことに本当に感謝しています。そして、皆さんの前で自分の発表をお話することが出来て、とても嬉しく感じます。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告 I 司会：渥美

工藤さん、ありがとうございました。

それでは早速ですが、釧路校2年生、佐藤朱里さんです。佐藤さんは足寄町立螺湾小学校で実習をされました。

「へき地校体験実習Ⅰ」

(実習校：足寄町立螺湾小学校)

北海道教育大学 釧路校：2年 佐藤 朱里



皆さん、こんにちは。北海道教育大学の釧路校2年の佐藤朱里です。発表を始めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

私は小学校時代に小規模校への転校を経験しています。大規模校では決して体験することの出来ないその時の多くの経験から、将来は自分が教師となって、へき地教育に携わりたいと思うようになりました。また、新入生研修を契機として交流のあるへき地校の様子から、へき地・小規模校教育を深く学びたいという思いを持ちました。今回の実習においては、学校・学級運営、複式授業における工夫、少人数という環境における課題についてサポートしてどのような対策をとり、教師に求められる力とは何かを学びたいと思いました。また、地域との繋がりなどへき地・小規模校について多様な面から学ぶ機会にしようと思い、本実習に参加をしました。

実習校の螺湾小学校は、足寄町の東に位置しています。日本一大きなフキとして、全国的にも有名なラワンブキが螺湾川に沿って自生している地域の学校で、産業は酪農と畑作が主体な地域です。児童数は13名で、教職員数は9名、学級編制は1年生と2年生が単式学級、3・4年生と5・6年生が複式学級で、特別支援学級が2学級あります。

実習2日目には、大地震による噴火を想定した避難訓練がありました。この地域は過去に十勝岳噴火の災害に見舞われた地域でもあり、災害への意識も非常に高いです。当日は雨が強く降っていたため、予定していた近くの避難所への移動は中止となりましたが、避難防具の着け方や避難経路の確認を行いました。児童も真剣な様子で参加していました。実はこの日の夜中に、台風による川の増水で螺湾川に氾濫の危機があるということから、校区内に住宅をお借りしていた私達実習生も避難することになりました。夜中から朝方にかけて眠れない状況が続きましたが、校長先生、教頭先生をはじめ、教職員の方達が夜通し警戒に当たる姿を見て、学校教育の別の一面を見ることが出来、教師はどんな時も児童の安全確保に努めなければならないと改めて感じました。

最終日には、毎年恒例の雌阿寒岳の登山が予定されてい

て、私達実習生もとても楽しみにしていましたが、台風の影響で地盤が緩んでいることから中止となりました。ここで急遽、お別れ会が企画され、レクリエーションを任せられた私達は、子ども達と楽しい時間を過ごすことが出来ました。その後、児童からのサプライズとして歌やメッセージカードのプレゼントがあり、感動の連続でした。

授業については、初めて観察する複式授業でしたが、教科によって授業形態を変える等、私にとって驚きと発見の連続でした。2つの学年を同時に指導する複式授業では、直接指導と間接指導を効率よく使い分けて指導することが求められるなど感じました。また、体育や音楽は全校合同での授業が行われていました。教師はどの学年でも、しっかりと参加出来るように工夫した授業を展開していました。特に音楽の授業では、高学年が低学年を引っ張るように大きな声で歌う姿が印象的でした。学校生活の中でも、上の学年が下の学年に教える姿をよく目にしましたが、こうした日々の生活が授業にも繋がるのだと感じました。ただマイナス面として、同学年の人数が少ないために教師は児童一人ひとりの様子や考えを理解出来るのですが、児童にとっては、たくさんの考えや意見に触れる機会が少ないという課題が生まれてくると感じました。また、2つの学年が同じ教室で学習しているため、一方の授業の様子が気になる様子も見受けられる等、様々な面から複式授業の難しさを感じました。

教壇実習は、3年生の単式の授業を2時間担当させて頂きました。児童が2人しかいないという環境の中で、どのように授業を展開していけばよいのか迷いましたが、放課後に先生方から熱心にご指導頂き、授業を作り上げることが出来ました。実際に授業をしてみて、たくさんの反省がありました。具体的に授業では、児童が生活と結び付けられるような課題や題材を取り入れること。児童主体の授業にするためには、児童一人ひとりの発言を丁寧に拾うことが大切だということ学びました。また、導入・展開・まとめといった指導課程を大切に授業を組み立てるという授業作りや、板書の作り方についても丁寧に指導頂きました。今回の実習を通して、少人数という環境の中で行われる教育の利点や課題、へき地校ならではの活動等、多様な面から学ぶことが出来ました。また今回は、数十年ぶりという台風被害による避難所での生活を経験し、緊急時の先生方の対応の仕方等、貴重な経験もたくさんしました。

実習全体を通して、先生方は一人ひとりの児童のことを考え、理解していくのだという印象を強く受けました。学校の規模に関係なく、一人ひとりの児童と真剣に向き合うという姿勢を私自身も大切にしていきたいと思います。また教師は、いつ、どんな時でも児童の安全を守る義務があるのだということをも身を持って学びました。1週間という短い実習期間ではありましたが、児童とたくさん関わり、教師になりたいという思いが一層強くなりました。更に、へき地・小規模校教育への興味や関心も強まり、へき地・小規模校における良さを大規模校にも生かせるのではない

かと考えています。実習中、私は児童や先生方よりも元気に、どの場面においても受け身の姿勢をとらないことを心掛けました。学級の児童の様子からも私の思いは伝わったのではないかとと思っています。

今回の実習での学びは、教師になるという目標の実現に向けた大きな糧になりました。へき地教育には様々な課題があると思いますが、地域と結びついた暖かい雰囲気、子ども達が思いやりの心を持って行動する姿等、へき地校の良さであると気付きました。今後は実習で学んだことを生かしながら、様々な学びを繋げていきたいと思っています。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

佐藤さん、ありがとうございました。

ここまで4名の方々に発表頂きましたけれども、2年生の段階で各キャンパスで行われている、へき地校体験実習のⅠの報告でした。

続いて、後2名の方々に発表して頂きますが、これは釧路校と札幌校。これは釧路校、札幌校、旭川校でも行われていますけれども、3年生や4年生が体験する、今度は実習のⅡに関する報告になります。

それでは釧路校の3年生、安田裕希さんです。安田さんは、標茶町立塘路小中学校で体験実習のⅡを経験しました。

「へき地校体験実習Ⅱ」

(実習校：標茶町立塘路小中学校)

北海道教育大学 釧路校：3年 安田 裕希



北海道教育大学釧路校3年目の安田です。私はへき地校実習Ⅱの一環として2週間、標茶町立塘路小中学校で実習を行いました。私がへき地実習Ⅱに参加した理由は2つあります。1つ目は以前大学の講義で先生がおっしゃっていた、経済的、物質的に豊かではないということが、すなわち、教育的にマイナスであるということの意味するものではないという言葉が意味するところは、一体何なのかということについて、実際にへき地校の教育現場に入って学びたいと考えたのが1つです。もう1つは、へき地校における効果的な英語教育について学びたいと考えました。

まず、実習校の様子についてお話をします。実習校の標茶町立塘路小中学校は、1つの校舎に小学生と中学生が通

学する、小中併置校になっています。私は主に中学校に入って実習を行いました。児童生徒数は、小学生が10名、中学生が8名で、小学生の全学年が複式学級、中学校は1・2年生が複式学級となっています。複式の教室には黒板は1枚しかないので、各学年がそれぞれ黒板の半分ずつを使って授業をするということになります。教職員数はスライドの通りです。また、中学校教諭5名というのは、それぞれ専門が国・数・英・理・社となっていますので、芸能教科は、免許外の先生が行っています。

それでは、まずはじめに、私が学びたいと思っていたことの1つであります、へき地・小規模校における効果的な英語授業について、授業観察を通して感じた強みというのを3点述べたいと思います。まず1つ目は、英語授業に対するレディネス作りがしやすいという点です。日常の中で英語に触れることの少ない生徒にとって、50分間の英語の授業を集中して勉強するためには、英語授業に対するレディネス作りというのが、極めて大切であるというふうに考えます。例えば授業の冒頭でWhat time did you go to bed last night?というように、生徒一人ひとりと会話することによって、レディネス作りがしやすいのではないかと考えました。2つ目は先程、旭川校の工藤さんもおっしゃっていましたが、生徒のつまずきに合わせて授業を進められるという点です。1学級、2人から3人でしたので、一人ひとりの宿題や英作文に現れた誤りに対し、適切なフィードバックを与えることが出来る点で、生徒1人ひとりに合った指導が出来るというふうに考えます。最後3つ目は、ALTとコミュニケーションを取る機会が非常に多いということです。私が実習を行った2週間で、ALTが2回来校されましたので、生徒はALTと英語でコミュニケーションを取る機会が多かったかと思います。またALTは、休み時間や給食の時間も生徒と一緒に過ごすこととなりますので、生徒はネイティブな英語を生でたくさん聞き、また、英語でALTに伝えるという機会に非常に恵まれているという点が、へき地校の良さの1つであるというふうに考えます。

では次に、教壇実習についてお話をします。私が教壇実習の指導案を作る段階で一番苦労した点というのは、多様な言語活動を行うのが難しいという点です。例えば、相手に英語で誕生日を聞いてみましょうという活動を取り入れたとしても、そもそも子ども達はお互いの誕生日を知っているわけですので、わざわざ、「When is your birthday」というように、誕生日を聞く必要性がないというふうに思いました。そこで私が授業を作る上で、次の2点を特に意識しました。1つは、相手とのコミュニケーションの必要感を生徒に持たせるということです。これは情報の格差があるところにコミュニケーションが生まれるという考えを活用した、インフォメーションギャップの手法を用いたタスクを生徒に与えることで、コミュニケーションの必要性を意図的に作り出すということを行いました。もう1つは、授業に先生方も巻き込んで言語活動も行ったりする等の工

夫を取り入れたということです。具体的に私が研究授業で行った授業なのですが、中学1年生の言語材料としては、命令文の授業だったんですけれども、せっかく研究授業ということで、先生方がたくさん見に来て下さるので、そういう先生方も言語活動に巻き込んでしまおうという考えで、例えば普段は命令することの出来ない校長先生だったり教頭先生に、今日は特別に命令もしていいよというような活動を取り入れて、子ども達が校長先生に対し、「singer song」って命令したら、校長先生がその場で歌うような活動を取り入れました。子ども達が結果的に、積極的に英語を使おうというような姿勢が見られたので、非常に効果があったというふうに思います。このように生徒同士だけではなく、また教室内だけでなく、教室を飛び出して、先生方や地域の方々とのコミュニケーションを取る柔軟性を持った言語活動が行われるというのが、へき地校の良さの1つであるというふうに考えます。

次に、少人数であることをデメリットとしてではなく、メリットとしてとらえる、へき地校ならではの教育活動を3点紹介したいと思います。まず1つ目は合同学習についてです。塘路中学校は近隣の中学校2校と柔道の合同学習を行っています。具体的な活動内容としては、このようになっています。こうした活動内容からも分かるように、柔道という競技を体験出来ることも目的の1つではありますが、何よりも集団の中で学習をする機会の確保、多くの友達と関わる機会を持つということが、合同学習の最大の目的ではないかというふうに考えます。2つ目は水曜デーについてです。水曜デーとは、毎週水曜日の昼休みに小学生と中学生と一緒に体育館で遊ぶ活動であり、児童・生徒が自分達で考えた遊びを持ち寄って、先生方も入って交流する場というのが設けられています。水曜デーとしての目的は、異学年との交流であったり、リーダーの育成というものが挙げられるというふうに思います。そういった環境があることで、塘路の子ども達は異学年と関わることに、ほとんど抵抗がないというふうに感じました。3つ目は放課後学習会についてです。塘路中学校では定期テストのような大きなテストが近くなると、放課後学習会というのが行われて、生徒が図書室に集まり、先生方が分からないところを教えてください。勉強が苦手な生徒であっても周りの生徒が一生懸命勉強している様子を見て、自分も勉強しようという気持ちになるし、先生方が付きっきりで教えて下さいますので、分からないところを重点的に勉強出来るという点で大変良い取り組みであると考えます。

それでは最後に実習からの学びということで、経済的、物質的に豊かではないということが、すなわち教育的にマイナスであることを意味するかという問いに対して、私なりの考えを述べたいと思います。確かにへき地・小規模校は人数が少ないということを考えると、何もかも自分達で行わなければならないので、へき地校の生活は子ども達にとっても、また教師にとっても楽なことではありません。しかしながら、へき地校は子どもと教師の距離が非常に近

い、そのため教師は子どもの成長や様子をよく理解出来るというふうに考えます。その結果、子ども達も自分の個性を十二分に発揮出来る、そういう場がへき地校であるというふうに考えます。つまりへき地校は、教育の原点であると言えると思います。今後少子化の波はどんどん押し寄せてきて、道東におけるへき地校の数は増々増加されることが予想されます。実際に自分が将来へき地校に赴任した際に、今回の実習が必ず生かされると考えています。2週間、塘路中学校で研修が出来、塘路中の生徒達に出会うことが出来て、増々教師になりたいという思いが強くなりました。今後は子ども達との触れ合いの中から学んだことや、校長先生はじめ、多くの先生方から頂いたご指導、ご助言のもとに、教師になるために一生懸命勉強してきたいと思いません。ご清聴どうもありがとうございました。

学生報告Ⅰ 司会：渥美

安田さん、どうもありがとうございました。

それでは続いて、札幌校の4年生、田中大地さんです。田中さんは、士別市立温根別小学校で体験実習Ⅱを体験しました。

「へき地校体験実習Ⅱ」

(実習校：士別市立温根別小学校)

北海道教育大学 札幌校：4年 田中 大地



北海道教育大学札幌校4年の田中大地と申します。よろしくお願ひします。

私は2016年9月、士別市立温根別小学校にへき地校体験実習に行きました。実習生は私以外に4年生1人、2年生1人の3名で実習を行いました。この写真に写っている3人です。今回の実習で3人は初めて知り合いましたが、協力して実習に臨むことが出来ました。

温根別小学校は士別市温根別町南1線にあり、札幌から約180キロの場所に位置しています。札幌から自動車です。温根別町の気候は、夏は温暖ですが、冬は積雪が2メートルに達することもあり、気温もマイナス30度近くになるなど、自然条件が厳しい地域です。産業は農業が主で平地では水稲、丘陵地ではじゃがいも、小麦、ビート、豆類を栽培し、酪農業もあります。児童の保護者が酪農という家庭もあります。

次に学級編制、職員構成です。学級数は、低・中・高学年1クラスずつで、3学級です。ひまわり学級の児童は基本的に3・4年の中学年の学級で学習しています。私は中学年に所属し、実習をしました。職員は8名です。大規模校では複数の教員で構成される校務ではありますが、職員数が少ないため、1人あたりの負担は非常に大きいと言えます。

次に実習の日程です。1日目には陶芸教室があり、児童と一緒に皿や湯飲み等を作りました。3日目の最終日に研究授業を行いました。教材研究の時間も当初は計画されていましたが、全て子ども達と関わる時間に充てました。授業見学をする中で、子ども達と関係を築くことに力を入れていきました。

次に実習の1日です。左が実習前半で、右が実習後半です。帰宅時間や就寝時間に変化があります。1週間実習だったので密度が濃く、一日一日が充実した実習でした。食事は基本的に自炊を心掛けました。

次に実習の様子です。こちらが陶芸教室の様子です。このような小皿等の制作に一生懸命取り組んでいました。子どもの中には、保護者にプレゼントすると言いながら作っている子どももいました。こちらが学校生活の様子です。中学年の算数の授業をしているところです。

次にこちらが児童会の様子です。高学年が中心となり、中学年を引っ張りながら学校をよりよくしていくための活動を考えていました。

次に研究授業です。研究授業は実習生3人とも算数の授業を行いました。私の研究授業のそれぞれの学年の目標は、スライドの通りです。今回の反省と課題は、3年生の授業では、児童が自分自身で計算の仕方を考える部分の深め方が今一つであったことです。児童は考え方を2つ考えました。他の考え方をと思い、答えの考え方をこちらから提示しましたが、目標とは少しそれてしまう考えを提示してしまいました。それよりは2つの考え方をもっと深め、児童がしっかり理解出来るような手立てをするべきでした。4年生の授業では既習事項も確認しながら、授業を進めることが出来ました。児童が1人でしたので、児童の思考に合わせることを意識することが出来ました。

学校での先生方の様子を見てみると、先生方は児童の成長をたくさん考えながら、学習指導や生活指導を考えていると感じました。特に感じた場面は、朝の会や帰りの会等の児童の言葉遣いの指導です。実習校では全学年で朝の会や帰りの会を1つの教室に集まって行っていました。先生方は児童の話の中で言葉の間違いを見つけると、その都度指摘して、正しい言葉に直していました。これは児童が学校の外に出たときに、正しい言葉で話せるようにするためです。児童が皆の前で一生懸命話すことにも意味があるかもしれませんが、正しく話すということにもしっかり重点を置いていました。他にも先生方を見て感じたことは、児童に指導するポイントを見逃さないようにしているということです。児童の行動を曖昧にせず、メリハリをつけた指

導を行っていました。笑うときには笑い、注意すべきことはしっかり指導していました。細かいことでも児童に指導を積み残してしまうことになるので、指導することで児童の成長に繋がっていると感じました。先生方のどの指導にも児童に親身な気持ちを感じられました。児童が少ないからこそ先生方は児童の特徴を把握しており、児童の良いところや直して欲しいところ等を知っていると考えます。学校全体で児童を育てる雰囲気もあり、個々の成長に繋がると感じました。教師が児童成長に力を尽くすことが大切と実感しました。音楽の時間の器楽では、児童が実践出来るようリズムに変える等して、練習をしていました。

今回の実習には、次のような課題を持って臨みました。実習目標はスライドの通りです。学習面ではわたり・ずらしを意識した授業作りを心掛けましたが、あまり上手には行ることが出来ませんでした。指導案には書かれていないようなこわたりを入れて、児童に合わせた授業を行うことが出来ると良かったです。授業の流れは児童の発言を広げながら行っていたので、児童の思考に沿った授業を行いました。児童が主体的な活動に教師の指導を繋げることが課題として残りました。指導案を書く時点でもっと計画を練る必要がありました。子ども理解の面では、児童と話したり休み時間に遊んだりすることで、子ども理解に繋げることが出来ました。先生方も率先して児童と遊び、児童との会話では児童の言葉を受け止め、児童を尊重する対応をしていました。関わりが深い分、児童との会話にも前に話したことと繋がりがあったり、日常生活の繋がりがあったりしました。先生方の振り舞いを見て、素直に正面から児童と向き合うことの大切さを改めて感じました。

実習を通して、今後の課題として考えたことは次のことです。研究授業の反省会で現場の先生に言われたことですが、私自身に表情が足りないとのことでした。授業の時の表情ではなく、何気ない時に出る表情があまりないとのことでした。子どもは教師の顔をよく見ているので、どんな時でも表情豊かに過ごした方がよいとのアドバイスを頂きました。特に、へき地校の小学校で子どもと教師の関係が密な中で、教師から子どもの関係を正すようなことはしてはなりません。いつも子どもに見られているという意識を持って、教師として子どもに関わっていきたいです。また、授業において子どもが主体的に活動出来るような授業を目標にしましたが、達成することは出来ませんでした。子どもの発言を取り入れながら授業を行いました。教師の誘導的な授業となってしまう。今後の取り組みでは教材の内容も考えて、子どもの思考を伸ばすような授業となるようにしていきたいです。現場の先生方は内容の繋がりや内容を深く知って授業を行っていました。その分、子どもの発言にも対応して、子どもの思考を伸ばすことが出来ていたと考えます。主体的な活動に繋げるために意識していきたいです。

最後になりますが、私自身は小中学校の実習を経験してから、へき地実習ということでした。教育内容というのを

もっと意識していればこの少人数であっても、もっと内容の濃い授業が出来たのではないかなと考えます。実習先では子ども達に恵まれ、子どもからももらったメッセージは、先生の授業は分かりやすかったというメッセージを頂きました。つたない授業ではあったのですが、子ども達が真剣に授業に取り組んでくれたことを糧にして、これからも頑張っていきたいなと思います。以上で発表を終わります。ありがとうございました。

学生による報告 I 司会：渥美

田中さん、ありがとうございました。

今、6名の方全てに発表頂きました。これから、皆さんしっかりと定刻で発表してくれましたので、20分から25分くらい質疑応答の時間が残っています。有効に時間を使いながら、質疑応答を進めて参りたいと思います。これから質疑をフリーで取って参りますけれども、HATO連携大学の方々、学生さんも14名いらしているようですし、旭川校のみならず、札幌、釧路、北海道教育大学のキャンパスの学生からでも構いません。また、参会の先生方、皆様方からのご質問でも構いません。挙手の上、所属とお名前を冒頭に述べて頂いて、ご質問を頂戴したいと思います。よろしいでしょうか。質問頂きましたら該当の学生さんは、立って頂いて回答して頂くというふうに進めて参りたいと思います。

では、ご協力をお願い致します。質問をお持ちの方いらっしゃいますでしょうか。挙手をよろしくお願い致します。

中妻（愛知教育大学）

愛知教育大学の中妻です。6人の方、報告ありがとうございました。特に実習で複式学級の教壇実習を経験された方に聞きたいんですけど、わたりをする時に、わたって残していく子ども達への指導をどうするのか。去年初めて鶴居村の小学校で、複式学級で実践をしている学生さんを目にしたんですけど、特にわたって残していく子ども達に対して、どんなことに気を付けて、次の別の学年にわたっていくのかお聞きしたいと思いました。

学生による報告 I 司会：渥美

ありがとうございます。関連してございますか。

それでは先程、田畑さんの発表の中で、こわたりがあった、わたり・ずらしは型ではないっていうふうに私メモしておりますけれども、田畑さんどうでしょうか。

田畑（北海道教育大学札幌校）

札幌校の田畑です。私自身は教壇実習でわたり・ずらしを用いた授業ではなかったんですけど、その指導を見ていて、残していく子ども達への配慮は、私が経験した士別市の糸魚小学校の3・4年生の学級は、それぞれ3年生は3年生で課題を残して、4年生の方へわたっていく。4年生の方へ課題を残して3年生にわたっていくんですが、そ

こで丸っきり放置といいますか、そこで子ども達に全部任せてしまうのではなくて、常に先生が気に掛けている状況です。3年生を見つても、4年生にも目を配って声掛けをしたりしている。教室内で声が飛び交うような状況が見られました。私は子ども達に全てを任せてしまうっていう方法も、子ども達が自分達の力で問題を解くっていう力を付けることが目的であるならば、それでも良いと思ったんですけども、実態は学習の差が大きいとか勉強が苦手な子が多いうことでしたので、3・4年生、別の指導を行っているけど、皆で勉強をしているっていう空間作りを教師がしていくってことが大事なのかなと、私は感じました。

学生による報告 I 司会：渥美

はい、ありがとうございます。立派な説明でした。

では続いて、西田絵里さん。私、専門は国語ですとのことで、この国語の5・6年生の複式の指導のずらし・わたりを用いた授業を今の質問を踏まえて、何か回答出来ることはありますか。

西田（北海道教育大学旭川校）

旭川校の西田です。私から言えるのは何もないんですけど、私が気を付けていたことは、まず教材作りの段階でワークシートをなるべく作って生徒達に渡すだけで、このワークシート何枚やってねって言ったたら、生徒達だけでも出来るようになるべく具体的な問題を書いたりだとか、ここまでやってねという、一言添えたワークシートを作ったりとか、ワークを解かせる時も、何ページまでやってね、もし時間が余ったら次はこれをやってね、というふうに、ポーっとしちゃう時間がないようになるべく、じゃあ次はこれをやってね、と見通しを持たせてあげることと、自分で出来るようになるべく具体的な指示を出したりするには、気を付けてやっているつもりでした。

学生による報告 I 司会：渥美

はい、ありがとうございます。

後は、他に発表して下さった学生さん、士別どうでしょう。温根別、複式でした。では最後、田中さんに少しコメント頂きましょうか。

田中（北海道教育大学札幌校）

札幌校の田中大地と申します。複式の授業をしたんですけど、私はわたる前に指示を出して、わたった後もその様子を見るってことを意識してやりました。授業はやっぱり、目標に向かって進んでいっているの、そういう目標に沿った活動をしているか、子どもがしっかり取り組んでいるかというのを意識しながら行いました。以上です。

学生による報告 I 司会：渥美

ありがとうございます。私も最近富みに複式の授業を見る機会に恵まれていまして、やはり最初、田畑さんが言っ

ていたように、片方に直接指導で入っている時も、教師はやはり間接の方も常に意識しながら動いていて、必要性に応じて小わたりを繰り返しながら、ケアしながら授業をしているなどと思います。それと同時にやはり、学習リーダーというんでしょうか、ガイドに基づきながら学習リーダーがしっかりと機能するような学習訓練でしょうかね、それを積み上げてくると両方、学び方の指導とそしてケアする教師の多面的な幅広い視野で指導するってところなのかなと思っていますんですが、小わたり、わたりの間接指導について、ご造詣の深い先生がもしいらっしゃいましたら、コメント頂きたいんですが。いかかでしょうか。

前田（札幌校）

札幌校の前田です。へき地実習の事前指導の中で、これはへき地実習だけではないんですけども、やはり、今日一番最後のところの報告で頂いたように、教育内容を教える中に、やっぱり教師がしっかり手立てとして構造化しておく。それに沿った教材を作り、段階的に指導をしていく。それに足りない場合は小わたりでフォローする。とにかくその教材の構造がしっかりするというのが一番の課題なんです、なかなかこれは言うてすぐ出来ることではありません。現場の先生もなかなか困っていると思うんです。そういうことも含めて、彼らがそれを感覚的に捉えています。講義で聞いたことを実際の先生達の授業を観察し、自分達もその難しさに気付いたというところが今の到達点じゃないかなというふうに、お話を聞いてて思います。以上です。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

はい、ありがとうございます。

最後、田中さんの話にもありましたけど、田中さんが最後までまとめだったからというわけではありませんが、私の印象に残っているのは、やはり教育内容の深い理解がまずあった上での指導方法の様々な具体化なんだろうと、前田先生も今の話に通じるお話だったのではないかなというふうに思っております。よろしいでしょうか。

それでは他にございますでしょうか。

仲沢（東京学芸大学）

東京学芸大学の仲沢実桜です。工藤彩美さんの発表を聞いていて、最後の8の課題、今後の取り組みというところで、授業作りに関しての知識不足だったりとか、有効な声掛けにどんな種類があるんだとかっていう、教えることをするにあたっての具体的なテクニックを学んでいきたいという気持ちが表れたのかなと感じました。それを本当に大学の教員養成課程の中で、具体的なテクニックも教えて欲しいなというふうに感じるのか、もしくは実践を積んでいく中で、自分で自ら気付いて学んでいきたいのか。知識とかテクニックが不足してるなとなつた後に、それをどう身に付けようとしていきたいのかなということが気になりました。工藤さんにも答えて頂けたら嬉しいです、それに

関して何か意見がある方がいたらそれもお聞きしたいです。お願いします。

工藤（北海道教育大学旭川校）

工藤です。質問にあったようには、効果的な声掛けということで、全ての生徒が積極的に話し掛けてくれるわけじゃなくて、やっぱり人と話すのが苦手な生徒もいるので、そのような生徒に対して、どのように声掛けをしたら心を開いてくれるとか、授業に対してもっと熱心に活動に取り組んでくれるのかっていうことだったんですけど、大学の授業でなかなかそれを身に付けるっていうのは正直難しいと思っていて、大学で聞いて教わっているだけでは身に付かないと思うので、今後の取り組みで話したボランティア活動とか、子ども達と関わる機会を自分から積極的に参加していかないと、いけないのかなというのは感じました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

はい、ありがとうございます。

これもなかなか、大学のカリキュラム編成とといいますか、今教育大学がおかれている状況に、身に詰まってくるような質問だったわけなんですけれども、研究と実践の往還というんでしょうか。これは古くから言われてることでありますし、アクション・リサーチというんでしょうか、自分で取り組みながら、そして内省しながらまた取り組んでいくといったような、内省する教師というんでしょうか。これはもう釧路校の川前先生、玉井先生等が出されていた本の中でも、へき地教育に関わる本の中でも盛んに述べられていることでありますけれども。今の学生さんが、例えば教育実習で座学を踏まえた上で、教育実習や体験実習を通して学んできたことで、課題を感じた。それをまた大学でどう学んでいくのかといったようなことの課題意識とといいますか、問題意識だと思えるんですけども、そのことに関わって、何かコメントをして頂けるような先生方はいらっしゃいますでしょうか。

私は実は、これもまたまた課題が大きな、今後もまた課題が見えてくる授業ですけれども、学校臨床研究という、双方向遠隔システムを活用した、課題解決型大学版アクティブラーニングといったものを進めておりますけれども、やはりこれも3年生の本実習を終了した後期から、次年度から必修で行う授業ですが、これにつきましてもやはり、実際に座学で学んだことを踏まえて教育実習で体験した、そこで学生達の皆さん、やはり自分なりの課題だったり、実践に基づいた問題意識を持って大学に帰って来ると思うんです。それについて我々大学の教育、教員もそれを踏まえた上でより具体的な授業、座学以上の授業を今後展開していきたいと思っておりますし、先生方もそのようなカリキュラム意識をもって授業をしているのかなというふうに思っております。

質問を頂きました東京学芸大学の学生さんは、例えば自分の問題意識っていうのは、それに関連してありますか。

具体的な話題だったり、自分の経験だったり。

松下（東京学芸大学）

東京学芸大学の松下と申します。自分の発表ではあるんですけど、実践を行うまで、なかなか座学が身に入らないっていうのが正直なところで、実践を通した後の座学は、物凄く面白くなったんです。その経験があるので、学芸大学は3年生から実習があるんですけど、もっと前から学べる機会があったらいいなと思っております。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

なるほどですね。目に見えてきました。私の授業でもやっぱり1年生だと、なかなかモチベーションが低いんですよね。説明をずーっとしてもなかなか身に入らないような感じで。でもやはり教育実習、3年後期ですけど、終わって帰ってきて3年後期になると、本当に目の輝きが変わってくるということもあります。それぞれの大学はどんなカリキュラムか、ちょっと私は分かりませんが、北海道教育大学では、教育フィールド研究とか教職実践研究といったような様々なフィールド科目研究がありまして、1年生の段階からボランティアに行ったり、様々なことをして今問題を出して頂きましたけれども、そういったことがクリアになっていくように、工夫・改善していくところになります。いかがですか、北海道教育大学の皆さんで。へき地校体験実習は2年生ですので、6名の方が発表してくれましたけれども、共通してあったのは、教職に対する強い思いがより一層高まった。当然ながらですけども、こういった取り組みは重要なのかなというふうに私も思っているところです。

他の観点で質問やご意見、ご感想があるような方がいらっしゃいましたら、お寄せ頂ければと思います。

吉澤（東京学芸大学）

東京学芸大学の4年の吉澤和也です。発表ありがとうございました。一番最初の複式学級の質問に少し関わる部分もあると思うんですが、僕はへき地教育について、実はそこまで詳しくなくて、今回初めて参加させて頂くんですが、同一の教室で複式の教育をする時に、1つに課題を与えて、もう1つに直接指導するというみたいな形が見られたんですが、1つの教室の中でそういうことをしていると、課題を与えたはずの児童がこっちの話を聞いて、お互い児童同士で影響し合ってしまったとか、先生の発言に対して反応してしまったとか、そういうことが起こらなかったのかなという単純な質問と、もしそれがあった時はどういうふうに対応していったのかなということを少しお伺いしたいなと思います。よろしくお祈りします。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

複式展開についての質問だったり、疑問だったりが多いようですが。複式学級だったよっていう。釧路校の佐藤さ

んは、今のお話どうですか。

佐藤（北海道教育大学釧路校）

釧路校の佐藤です。発表でもしたんですけども、やっぱり一方の授業が気になって、やるべきことに集中出来ないっていう場面は、私は3・4年生の配属学級だったので、結構見る場面はありました。そういう時に担任の先生は、今やることは何？とか、そういうふうに声掛けをして、自分がやるべきことに戻らせていました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

他にどうですか。西田さん、どうですか。

西田（北海道教育大学旭川校）

西田です。私が担当したのは5・6年生だったので、1年生から複式だったので、もう慣れていた感じなんですけど、教室形体がこっちが黒板だったら、もう1つはこっちと、90度の感じだったので、まずそういう教室の環境作りから大切にしていたことと、それと先生が、常に明確な課題を出していて、2人とか、多くて4、5人しか学年にいなかったんで、先生が戻ってきたら全員のノートを覗き込んだりとか、ここまでといったドリルを覗き込むようなことがあったので、先生が、何分くらいに戻るからね、というのがあったので、自分達で時間を意識しながら、先生が戻る時までには、何とか自分だけが終わっていないというのを少人数だからこぼれてしまうっていうのを生徒達も達も分かっているんで、皆、割と私の学校は必死に一人一人解いている姿の方が印象的でした。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

田畑さんはどうですか。

田畑（北海道教育大学札幌校）

田畑です。糸魚小学校の3・4年生学級の担任の先生がいらっしゃって、職員構成のところを見て頂くと、学習支援員という方がいらっしゃいます。糸魚小学校には教職員が数名多い状況だったので、私が算数の授業を見させて頂いた時に、担任の先生に加えて、学習支援員の先生が1、2名出入りしている状況でした。なので、例えば4年生の方で直接指導していた時に、3年生は学習支援員の方が見て下さる状況だったので、勉強を何をすればいいのか分からなくなってしまふような状況とか、4年生の方に気を取られてしまうという状況はなかったように思われます。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

私の経験ですけど、以外と大丈夫なんです。ただし、教師が大きな声を出してガンガンやるっていうのは、あまりふさわしくないかなって。しっとりとした雰囲気の中で、子ども達と落ち着いた環境の中で学んでいくことが積み重ねられていると、たまに違う展開、教師が向こうにわ

たっていると、こっちの児童が引っ張られたりってことは少ないかな。どちらかと言うと、自分達で進まなきゃいけないという責任感がメラメラと学習リーダーに湧いていて、子ども達だけで授業が進められているっていうことが多いように思います。加えて言うと、今後は教師が離れている時の子ども達の、いわゆる交流学习と言うんでしょうか、学習リーダーに基づいて進めている対話的な学びがどれだけより質の高いものになっていくのかっていった観点で、先生方は恐らく校内研修を進めていかれるんだろうなと思って、私はいつも見えています。よろしいですか。

もうそろそろ時間が迫って参りましたが、最後に釧路校の安田さん。大変立派な塘路小中学校での発表がございました。英語の話でしたけれども、これに関わって特に質問をして頂きたい。よろしくお祈りします。

島崎（大阪教育大学）

大阪教育大学の島崎と申します。6名の皆さん、報告ありがとうございます。では、安田さんに質問させていただきます。

安田さんの報告の中に、小規模校、大変だった。大変だけど子ども達の個性が発見されたとお話があったと思うんですが。実は私先週まで、HATOの別のプロジェクトで鉄矢先生と一緒に、島根県の離島で、小規模校の小学校、中学校、高校とある地域に行ってきたんですけども、その高校の指導をされている先生が、実は島の子はなかなか個性を出さない。小規模校の中にいると自分を出す必要がない。皆知っているから、役割も決まってしまうから。なかなか新しい自分に気付かない。島の外から留学生達がやってきて、触発されて、そこで出さなければならぬ一面に初めて気付く。そこから個性を出す。そんなような話を聞いたんですけども、安田さんの行かされている小中学校では、しっかり出せているのは何故なのか。その辺ちょっと教えて下さったらと思います。以上です。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

ありがとうございます。

では安田さん、よろしくお祈りします。

安田（北海道教育大学釧路校）

釧路校の安田です。先程の発表の中でも色々なへき地校ならではの取り組みということで、水曜デーという活動があるというお話をさせて頂いたんですけども、水曜デーというのは、毎週体育館で遊ぶんですけども、その日遊ぶ内容っていうのは子ども達がそれぞれ、この日は誰々が企画して、次の週は誰々が企画するというふうに、企画する人がどんどん変わっていくんです。そうすると、普段はおとなしいような子であっても、水曜デーを企画する立場になったらきちんとして、皆をまとめたりだとか、これからやる遊びについてきちんとルール説明が皆の前で出来たりとか。人数が少ないからこそ子ども達が活躍できる場って

いうのが1人1人にあって、そういった面で自分達が持っている個性だとか、元々持っているけど普段は出せないようなものでも、そういった環境があることで自分を出せたりだとか、という工夫があったのかなというふうに思います。答えになってないかもしれないんですけど。ありがとうございます。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

ありがとうございます。皆さん、まだまだ質問をお持ちだと思いますが、定刻になりましたので、休み時間等に学生6名に、お話を聞いて頂ければと思います。

では、報告Ⅰの講評ということで、田中先生、どうぞよろしくお祈り致します。

〔講評〕

田中 和敏 氏（中富良野町立旭中小学校 校長）

ご紹介にあがりました。ホームページ上には、中富良野のことを花と香りや味覚の町と書いてあるんですけども、北海道にお住まいの方は富良野方面、花で有名なことはご存知かなと思います。花があれば香りもある。中富良野は、



味覚は住んでいても良く分からないんですけども、その中富良野にあります、旭中小学校と言う、今25名の児童が在籍している学校に勤務しております、田中と言います。今日はこのような場にご招待と言いましょか、機会を頂いて、大変ありがとうございます。私は講評など出来るような力がないので、講評については後で総括ということで、中澤先生の方でして頂けるかなと思います。私の方は実習の様子ですとか、今日の発表の様子、それから、へき地・複式校に勤務する教員としての思いを少しお話をさせて頂ければと思います。

まず、私とへき地教育関係の実習の関わりについてです。本校では北海道教育大学の旭川校でしょうか、基礎実習ということで、1日の体験と言いましょか、授業参観等に来て頂いています。本校でそれを2回程、担当させて頂いております。それから今日のお話にありました、いわゆるへき地の実習ですけれども、私先程、報告の中でありました、前任が麓郷小学校というところに勤務しておりました、そこで3年間、実習生と一緒に勉強させて頂きました。それから本校では今年から実習生を受け入れさせて頂いて、

計4回程、実習生の様子を見させて頂いてますので、そんなところから少し感想も交えて、少しお話させて頂きたいと思っています。

実習に来られる学生の皆さんは、本当に行かなければならないという状況で来られているわけではありませんので、それぞれ目的意識、高い意識を持って、実習に参加されているのかなというふうに感じております。特に2年生については、初めての学校現場に訪問するというので、非常に緊張であったり、分からないことだらけの中で大変だったのかなと思いますけど、そんな中でもそれぞれ自分なりの目的等を持ちながら、真剣に取り組んでいたんだなど。時には悩んだり、汗をかいて苦しい思いをしたりしながら、指導案を書かれてる方もいらっしゃるのかなというふうに思います。そんな姿を見ていた私も40年前に、私の時はこういう実習はありませんでした。いわゆる5週間の小学校の実習に行っただけですけども、その時の自分と比べて余りの違いに、少し恥ずかしいやら、この方達にはアドバイスをしていいのかなという不安を覚えながら、実習生の皆さんとお話をしたと記憶をしています。

特にへき地・複式小規模校っていうのは、色んなところで課題があったり暗いイメージがあったり、大丈夫なのか心配なイメージがあるんですけども、それぞれの学校が色んな取り組みをしています。その良さを本当に上手く見つけ出したり、その教育に良さを感じて頂けてるかな。それから、それぞれの学校の強みでしょうか。学校によって得意、不得意、或いは取り組みの内容に色々な違いがありますけれども、それぞれの学校の強み、頑張っているところを本当に良く見ていてくれるのかな。これは学校で一切授業をやったり、学校に勤務している人間にとっては、その時に学生の皆さん、或いは地域の皆さんに、そういう良いところを見出して頂くっていうのは、我々の励みにもなるということで、大変ありがたいなというふうに思っています。

もう1つが今日の実習の感想も含めてなんですけれども、へき地・小規模、或いは複式のことについて、色んな研究だとか取り組みをしています。その中には、メリットとデメリットがあるということをお話の中にもたくさんあったかと思えます。今、メリットの部分はたくさんあるんですけども、どうしても人間はデメリットの方に目が向くのかなというふうに思います。その中で、わたりがどうか、ずらしがどうかというようなお話もありました。でももしそれをメリットの方に考え直すことは出来ないのかなというのが今、先程一番最初にご紹介頂きましたけど、私、へき地・複式教育関係の研究団体にも所属してますので、そこでも話題になっていることです。デメリットだから大変だ、どうしたらいいんだろうと考えるのも勿論大事なことです。それで克服していかなければいけないこともたくさんあるのも事実ですが、今我々はへき地であるとか、複式であるとか、小規模であるとかというのは、それはメリットなんだ。それをどう生かすか、もっと考え

るべきではないかということで、色んな取り組みをしているところです。そう考えた時に、例えば複式、今までの中では、どうしても外から見てると2つの学年を一度に教えます、大変です。こっちやってる時、あっちどうしたんだ。間接指導の時、子ども投げといてって表現、北海道弁ですね、投げといてっていうのは。ほっといてこっちだけ一生懸命やってればいいのかというような考えを現場の先生方でも、初めて複式の学級に来た時には、お話する方たくさんいらっします。でも、そうじゃないんじゃないかと考えてる方もたくさんあります。

私、あんまり勉強している方ではないんですけども、色んなものを見ていますと、例えば教員養成大学の中には、わざわざ複式学級を作っている附属学校があるというふうに聞いています。いくつかの学校のお名前を聞いたり、その先生方とお話をする機会もたまに得てはいますけども、わざわざ大学に作っている。多分、大学ですから研究のために作ってるんだろうなと1つの発想がある。ただそこに、わざわざ通わせる保護者の方がいらっしてって考えた時には、或いは大学ですから、多分我々の公立学校と違って、授業料を払って子ども達を通わせると思うんですけど、お金を出してまで通わせるってことは、そこに大きな意味があるんじゃないかなというふうに、私は感じています。それをどういうふうに捉えていかけてことが大事なのかなと思っています。例えば、これは私の考えですので、皆さん同じかどうか分かりません。間接指導っていうのは手を掛けられないのではない。そこで子ども達が一生懸命何かをやるんだって捉えたら、その時にわざわざ一生懸命やっている中に、横から口を挟むのか。教員が色んなことを言って、子ども達一生懸命やっていることを邪魔してるんじゃないかっていう考えもあるかもしれないなというふうに思います。勿論、それだけでは授業は成り立ちませんので、こわたりがあったりずらしがあったり、或いは同時間接というような手法がたくさんあります。それぞれ意味があるんですけども、それは複式の授業に対応するためではなくて、子ども達が複式の授業の中で伸びていくための手段として、方法論として考えていくと、少し違った見方も出来るのかな。或いはそのためには教員として、子ども達が一生懸命間接指導で頑張っている時には、それを黙って見ていることも大事なのかな。これは先程一番最初の中で、川前先生からお話頂きました、複式、或いは小規模校の教育というのは、単式って言いましょうか、いわゆる普通の学級の中の授業の中でも、全部生かせるところがあるというお話をされてました。今私もその通りだなというふうに考えています。というのは、複式の授業でなくても子ども達に、これ皆で考えてごらん、話し合いをしてごらん、と投げかける場面たくさんあると思います。その時、すいません、私の下手くそな授業では、子ども達に、じゃ考えてね。3分経つと、ごめんごめん、これ言うの忘れてた。子ども達が何かをやり出すと、自分が想定していないことだと、ちょっと待ってね、今のこれ違うよ、こっちだよ、

とかっていうふうに色々なことを口で言っただけです。これは私が教材研究をしてないから、授業の力がないからです。それを予想してきちっと課題を与えておけば、その間、子ども達が何をやっているか、必死に我慢してみたり、或いは自分は必死にならなくても、子ども達はどんどん、どんどん学習をしていく。そんな授業も展開できるのかなというふうに感じてます。それは口で言うのは簡単です。これを実際にやろうと思うと、そんな簡単なものではないですし、それが本当に出来る教員がどれだけいるか分かりません。ただ、そういうことが出来る先輩もいますし、そういうことを理想にしていかないと、私達のへき地・小規模・複式の学校の中では、それを生かすことは出来ないのかなというふうに今感じています。

今の若い学生さんと言いましょか、私達の頃と違って一生懸命、先程話した皆さんやるんですけど、1つだけ私が思っていることは、理想と言いましょか、こんなことやってみたいな、先生方あんなこと普段言ってるのに、全然出来てないじゃないか。ある意味批判的であったり、自分の理想を求めて、或いはそれを今回のような実習の中で、出してる方は少ないのかなというふうに思います。多分私が担任だったら、そんなこと言われたら、お前じゃあやってみろ、ふざけんなって言いたくなるんですけども、でも皆さんはそれが言えるのかな。私のところの教員がそれを言えば、ちょっと校長室で色々なお話をするかもしれませんが、皆さんはそれが出来る立場にあるのかなというふうに思います。そんな意味で今回の実習だとか、或いはこれからの実習を通して、皆さんの是非、理想の教育指導、或いはへき地・複式で勤務をしたいなと思ってらっしゃる方は、その理想を作って頂きたいなというふうに思います。そのために必死になって頑張る、そんなことを期待したいなというふうに今考えて、発表等を聞かせて頂きながら感じていました。

へき地に勤務する、研究団体に所属しているということで、1つだけお話を最後にさせて頂きたいのは、昭和30年代、随分古い話です。私も31年生まれですので、私が生まれる前の方のお話なんですけど、東井義雄という方がいらっしゃいました。当時は大変有名な方だったんですけど、その方がこんなことをおっしゃっていました。村の若者が都市に出てしまうことは仕方のないことだ。ただ、子ども達が生活の中から自分のこととして問題を見つけ、主体的に思い、考え、身に付けた学力は村を愛し、国や社会を大切に作る学力に繋がっていくというようなお話をされました。これは今、そのまま通じるかどうか分かりません。ただ私は、今いる子ども達にそんな思いで接したいなというふうに思っていますし、職員と話す時には、子ども達が大人になった時に、自分が住んでいた町や村が、あんな所へはもう二度と帰りたくないとか、あんな所で育ったから、そんなふうには言って欲しくないな。あの町は良かったよ、本当は戻りたいんだけど、色々な事情があって今東京にいるよでもいいと思います。そんな思いで子ども達が生活出

来る、或いは勉強出来るような学校にしたいなというふうに、今職員と共に取り組んでいます。

まともじゃありませんけれども、是非先程言いました、皆さんの理想する教師像、或いはへき地校に対する強い思いを抱いて頂いて。北海道の場合、初任校がへき地・複式の学校に行くことはないというふうに伺っております。2校目、3校目、私は退職してしまうので、待ってるよと言えないんですけども、是非、へき地・複式の学校に行ってもらって、その良さを生かすような、そんな先生になって頂ければと思います。今日は勉強させて頂きました。どうもありがとうございました。

学生による報告Ⅰ 司会：渥美

皆様のご協力のおかげで、司会はつたなかったんですけども、非常に中身の濃い、盛会で終わることが出来ました。

改めまして、発表してくれた6名の学生と講評頂きました田中先生に、盛大な拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。

総合司会：戸田

それでは学生報告Ⅱということで、ここからの司会を北海道教育大学釧路校の長谷先生にお願いします。よろしくお願いします。

学生による報告Ⅱ

司会：長谷 博文

(へき地教育研究支援部門 釧路校センター員)

皆さん、こんにちは。北海道教育大学釧路校の長谷と申します。この学生報告Ⅱの方の司会を務めさせていただきます。

それでは報告に入る前に、流れを確認させて頂きたいと思います。ご発表頂くのは4つの大学の学生さんから、それぞれ発表して頂くことになっております。各大学の持ち時間は18分となっております。ですので、1分前の17分になったら鐘が1回なります。18分になりましたら、2回なりますので、2回目の時点でもし続いているようでしたら、さりげなくフェードアウトして、バトンタッチをして頂きたいというふうに思いますので、時間厳守でお願いしたいなと思っております。

それから質問につきましては、この報告Ⅱの中では質疑応答は致しません。この後のワールド・カフェの中で質問をして頂くこととなっております。質問したいなと思ったことがあっても、忘れてしまうことがあるかもしれないので、こちらの日程を書いている冊子の一番裏に付箋冊子があるんです。こちらを取り出して頂きまして、こちらの方にどんどん質問を書き込んで頂きたいと思います。よろしいでしょうか。途中もし付箋が足りなくなったら、手を挙げれば誰かが持ってきてくれると思うので、お願いしたいと思います。

では、早速最初は大阪教育大学の方ですね。お願いしま

す。

◇大阪教育大学



HATO連携大学における多様な学習と学び 「遠隔地実習：愛知県西尾市立佐久島小学校」

大阪教育大学：2年 尾西 英

大阪教育大学の中澤です。阿部です。尾西です。

それでは私達が参加した、遠隔地実習についての報告を始めさせていただきます。

まず大阪教育大学の教員養成課程では、積み上げ型の教育実習を行っていて、1回生の時には必修の観察実習、2回生の時には選択の実習として、体験実習というものがあります。この体験実習のオプションとしてあるのが、今回私達が参加した遠隔地実習です。3回生で必修の基本実習、4回生で選択の併修実習、発展実習と続く、というカリキュラムが組まれています。それぞれの実習の詳細については、配布資料に記載しておりますのでご覧ください。

そもそも遠隔地実習というのは、2回生の夏休みに2週間だけ、遠隔地で行われる実習のことを指します。実習先は愛知県西尾市立佐久島小学校、長野県白馬村立白馬南小学校、三重県津市立川口小学校の3校の中から自分達で希望します。2週間の実習期間中は、チームのメンバー6人で共同生活を行いながら、一教員として学校に関わり、その中で企画授業を行いました。この企画授業というのは、自分の専門を生かしたり、してみたいと考えることを自分で企画・考案して、それを授業として実際に子ども達にさせて頂いたものです。また、先程お話した共同生活についてですが、2週間6人が同じ宿舎の中で生活を行います。家事も6人で分担して生活をしていました。最初は共同生活ということに大きな不安がありましたが、互いに悩みを打ち明けたり、また学んだことを毎日共有し合うことが出来たのは、共同生活を行っていたからこそ出来たことであり、共同生活をしていたからこそ、この2週間の実習はより中身の濃い、充実したものになったと実感しています。

次に私が実習をさせて頂いた、愛知県西尾市立佐久島小学校についての報告に移ります。私が佐久島小学校を選んだ理由は、島での教育に何よりも興味を持ったからです。島という限られた場所、また、少人数学級でどのような教育が行われているのか。更には、その教育について島なら

ではの魅力、反対に課題などを知りたいと思い、希望しました。また、3回生の基本実習の前に、実際の教育現場に出る機会も欲しいと思っていたこともあり、遠隔地実習への参加を決意しました。

佐久島は、本当に小さな島であります。全校児童は16人と大変規模の小さな小学校で、特徴としては複式の学級であること。また、佐久島以外から通学する子どももいるということが挙げられます。この通学の仕方によって子ども達を「しまっこ」、「しおかぜ」と学校では呼んでいました。「しまっこ」というのは、佐久島に住んでいる子ども達のことを指し、「しおかぜ」は佐久島以外の西尾市に住んでいて、船を利用して通学をしている子ども達のことを指します。「しおかぜ」の子ども達の中には問題を抱えていたり、通学しずらくなったため、関わり方を学ぶために、あえて佐久島小学校を選択したという子どももいました。また、「しまっこ」についても高校で佐久島から出た時に、大人数の学級の中に上手く溶け込むことが出来るかといった課題があるということを先生に教えて頂きました。

次にこの2週間の実習の中で、私が最も悩んだことについてお話します。それは授業についてでした。私が国語教育を専攻しているということもあり、企画授業として小学5年生の女子児童1名を対象に、国語の授業を2度させて頂きました。しかし、2回とも全く手応えのない授業となり、毎回とても悩みました。というのは、1対1の授業であるため意見が1つしか出てきません。そのため、そこからどのようにして深めていけばいいのか、どのようにして進めればいいのか分かりませんでした。更に、沈黙に耐えられなかったこともあり、どんどん質問を投げかけてしまい、方向性がずれてしまったり、子どもの意見をきちんと待つということが出来ませんでした。また、本文に返しながら授業を進めるという、根本的なこともできず、本当に反省点の多い企画授業となりました。

こうした実習での経験を踏まえて私が感じたことは、少人数の学級だからこそ、全員の意見を教師が拾うことが出来ます。そのため子どもにとって安心出来るクラス、何でも言えるクラスが自然と出来上がる、ということが小規模校の魅力だと感じました。しかし少人数の分、多様な意見というのは少なくなります。だからこそ、そこで必要なのが教師の力量なのであり、教師の導き方が何よりも求められていると感じます。そのためには、自分自身の中にたくさん知識を蓄えておかなければならないのであり、その蓄えをしておくことが大学生の今の私達に求められていることだと思います。また、教師が子ども一人ひとりにきちんと寄り添うことの出来る環境があるということが、理想的な教育の姿だと思います。その理想的な教育が当たり前のように出来ていたのが佐久島小学校でした。2週間、島での教育を肌で感じる事が出来たことは、私にとって本当に貴重な経験であり、島での教育に対する憧れの気持ちがとても強くなった実習でした。

「遠隔地実習：長野県白馬村立白馬南小学校」

大阪教育大学：2年 阿部未奈美

次に、白馬南小学校の報告をします。

白馬南小学校は、長野県北安曇郡白馬村に位置します。生徒人数は1学年20人の約120人の学校です。北アルプス山脈の雄大な自然に囲まれていて、スキー等のマウンテンスポーツが盛んであります。写真は2月に行った時の小学校の様子です。

私が遠隔地実習に行こうと思ったきっかけは、初めは遠隔地実習があると、学校内の紹介で知りました。その紹介で見知らぬ土地に行って2週間の実習を行い、普通に生活していたら出会うことのない、他学科の人達との共同生活に興味を持ちました。また、実習校3つの紹介を聞き、白馬南小学校の先輩達が本当に楽しい、やりがいがあったと胸を張って言っていたからです。2つ目は基本実習に対して不安があったからです。塾講師等をやっていないで、前に立って授業をする経験が模擬授業でしかありませんでした。白馬南小学校では1人1回企画授業が出来るということで、白馬南小学校を選びました。

白馬南小学校での学び、1つ目は企画授業です。先程も言ったように、1人1回ずつ企画授業を行いました。これがその授業です。このような授業をやる内容はそれぞれありますが、自分の得意とする専攻科目を選んだり、4年生であれば白馬村でのお祭りの囃しを使ったりコーダーの授業を行ったり、5年生の世界から見た日本の姿は、実際に留学に行き感じた、世界でも有名な日本の行事や文化を伝えたいという理由で行いました。このような授業をするにあたっての不安はそれぞれありました。自分が伝えたいことと、教科性に繋がりがいいのか、授業のねらいを達成出来るのか、子ども達の発言に対し、臨機応変に対応出来るか等の不安がありました。

このような授業を終えて気付いたことは、クラスにいる子ども一人ひとりを見て、理解出来ているか把握をすることが難しいこと。ねらいが達成することが難しいこと。思ってもみない発想を子ども達が持っていること。実験に失敗した時の対応策が不十分であったこと等がありました。企画授業が終わった後は、担任の先生、教頭先生、校長先生からの事後指導や貴重なアドバイスを頂きました。授業を考える際は、宿舎で1人で抱え込まず、6人で相談し合ったり、話し合ったりしながら考えました。

白馬南小学校での学びの2つ目は運動会です。練習から本番まで見て、毎日毎日出来るが増えていく子ども達の成長する姿を見て、教師の魅力を改めて実感することが出来ました。高学年リレーでは6年生が率先してバトンプスの改善点を言い、練習に繋げたり、4年生も5・6年生の意見を聞くだけでなく、自分達の意見を言い合えるいい関係作りが出来ていました。低学年の南中ソーランでは、子ども達と一緒に教えるために、夜必死に宿舎で南中ソーランの練習を6人でしました。すると先生達から、一緒に踊って下さいと言われて、本番一緒に子ども達と南中ソー

ランを踊ることが出来ました。

実習での成果、1つ目は3回生の基本実習前に課題を発見することが出来たことです。自分の考えを押し付けるだけでなく、子どもの個性や能力等、特性を知るために、たくさん子ども達と関わるのが、授業作る上で大切であると思いました。2つ目は仲間の大切さに気付いたことです。1人で抱えたり、考えたり、抱え込まず、仲間に相談したり頼ることが大切であることを気付かされました。

「遠隔地実習：三重県津市立川口小学校」

大阪教育大学：2年 中澤 尚紀

では、僕の方から川口小学校での学びについて紹介させていただきます。

まず、川口小学校ってどんなところっていうことで、場所は三重県の津市。人数は全校生徒103人で、1学年約20人程度。大阪の小学校に比べると、かなり少ないかなという印象でした。学校の特徴は、人権教育研究校っていうのが大きな特徴で、地域的にも家庭的、経済的に苦しい環境で育つ子どもが非常に多く、この川口小学校での教育活動の全ての基盤が、人権教育であるというのが大きな特徴です。また、日々の家庭訪問にも力を入れているということで、後程、説明させていただきます。

僕が川口小学校に行こうと思った2つのきっかけを紹介させていただきます。1つ目は、様々な環境で育つ子どもと関わるためです。教師になる上で、自分とは育った環境が違う、厳しい環境で育った子ども達と関わるのがなかったため、実際に自分が教師になった時に、本当に厳しい環境で育つ子ども達に寄り添うことが自分は出来るのだろうか、というのが僕の中で大きな悩みでした。人権教育研究校であって、子ども達の考え方にも凄いい長けていらっしゃる先生達のもとで学ぶことで、何か自分の中で掴めるものがあるんじゃないかっていうのが1つのきっかけです。

2つ目は、教師という仕事に不安があったからです。現場の先生がどのような仕事をしていて、どのような1日を送っているのかを2週間という長期の間、1人の教師として扱ってくれる遠隔地実習に行くことによって、自分の中で先生の仕事がどのようなものなのかを少しでもはっきりとイメージ出来たらいいなと思ったのがきっかけです。

川口小学校での学びということで、家庭訪問体験をさせて頂きました。僕が先生達の家庭訪問に付き添わせて頂いた中で見つけた、自分が気付いたことを3つの視点から紹介させていただきます。

1つ目は、毎日の家庭訪問であったということです。通常、家庭訪問っていうと1年に1回。或いは1学期に1回っていうのが一般的だと僕の中で思っていたんですけど、川口小学校では1日数軒の子どもの家を毎日訪問していました。

2つ目は、褒める家庭訪問だったということです。家庭訪問って聞くと、どちらかというと生活面のことで怒られたり、或いは成績のことで言われるネガティブなイメージ

が僕の中ではあったんですけど、川口小学校での家庭訪問は、褒める家庭訪問っていうのを大切にしている、些細なことでも、普段の生活の中で見つけた子どもの良さであったり、子どもが成長したところを保護者に報告していました。

3つ目は、その家庭訪問が、全て気づく家庭訪問であったということです。家庭訪問を繰り返す中で、普段の学校では見せない子ども達の姿に気付くことが出来ました。学校の教室だけではなくて、普段の休み時間であったり登下校であったり。そしてその家庭での様子まで足を踏み入れることによって、本当の意味で子どものことを理解することが出来るんだってことに気付かされました。

川口小学校の学びの2つ目ということで、1人の子どもと向き合うという視点から説明させていただきます。川口小学校全体で1人の子どもと向き合うのを凄い大切にしている、実習生も川口小学校に行った時に1人のこだわる子、自分の思いを伝えたい子であったり、どうしてもこの子に成長してもらいたいって子どもを1人決めて、2週間こだわって、向き合い続けます。一瞬、1人の子どもと向き合うって聞くと、自分の中で不公平じゃないかなってという思いがあったんですけど、実は実際にやってみると、1人の子どもにこだわって注目することで、その周りの子のいいところや課題を見つけて、更には、クラス全体のいいところであったり、課題が見つかることに気付くことが出来ました。1人の子どもにこだわるということは、クラス全員と向き合うことに繋がるということを実感しました。そして何より、2週間1人の子どもにこだわり続けて、向き合い続けたこの2週間という期間は、僕の中で凄い貴重で充実した時間になりました。

最後に遠隔地実習を体験してということで、遠隔地実習の学び、全体を総括させていただきます。

1つ目は、自分の強みと課題がはっきりしたということです。僕達は子どもと関わり本気で向き合う2週間の中で、自分自身の強み、課題を発見しました。私自身は子どもの良さ、いいところをたくさん見付けることが出来たのが自分の中で強みだなと感じる一方で、子ども達の関わり方、接し方、或いは声掛けにおいて、まだまだ課題があるなと思いました。僕の中でどうしても、実習で来たお兄さんという形で終わってしまった気持ちがあって、1人の先生、1人の生徒っていう関係が上手いこと気付かなかったなっていうのが僕自身の課題であるなと思いました。2週間の中で上手くいかないこともたくさんあったんですけど、必死にもがき続けた2週間っていうのは、本当にかげがえない充実した時間でした。

2つ目は、教職の魅力に気付けたということです。僕達は2週間、1人の教師として現場にいる先生達の仕事を体験させていただきました。授業が終われば会議や授業の準備やイベントの準備等で、夜遅くまで残る仕事をしている先生達の姿を見て、最初はそんなに働きたくないと思っていたんですけど、正直。でも子ども1人ひとりを見ていて、

どうしたら子どもが成長してくれるのかっていうことを一所懸命考える先生達の姿が、本当に素敵で魅力的でした。校長先生が最後の日に僕に言ってくれた言葉なんですけれど、人生、教師という仕事に人生をかけて生きていくのであれば、せっかくだからいい仕事にしたい、せっかくだから誇りが持てる仕事にしたいと言っていたのが、僕の中で忘れられません。子ども達と全力で関わる中で、数えきれないほどの悔しさや、数えきれないほどの喜びを感じる事が出来る教師という仕事に、僕は凄い魅力を感じました。僕達はまだ2回生なんですけれど、遠隔地実習で学んだたくさんのお話をこれから3回生、4回生に控えている実習へ繋げていけるようにしたいです。

以上で大阪教育大学の報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅱ 司会：長谷

ありがとうございました。17分59秒、凄いですね。ご協力ありがとうございました。

それでは次、東京学芸大学お願いします。

◇東京学芸大学



HATO連携大学における多様な学習と学び 「島実習について」

東京学芸大学：4年 吉澤 和也

では、発表させていただきます。まず、東京学芸大学の教育実習に関する概要を説明したいと思います。

東京学芸大学は平成27年度の入学者から、教育学部が学校教育系と教育支援系とに分けられています。学校教育系であるA～D類は、教員免許取得が卒業条件となっていて、それぞれ実習が必修となっていますが、今回は小学校免許、中学校、高校免許取得に関わるA類とB類に関して説明を少ししたいと思います。

A類B類は共に1・2年で基本的な内容を修得した後に、3年次で基礎実習、そして4年次に応用実習と副免許取得希望者は選択実習を行います。基礎実習と応用実習についてももう少し細かく説明したいと思います。

基礎実習は3年次に行いまして、学芸大学附属の小学校、中学校、高校で行います。実習期間は3週間で、A類では1学級に4人から5人でのグループの実習となります。内

容は指導案作成とか、授業作りとか、後は児童の実態把握が主になります。4年次の応用実習では、学芸大学の公立協力校で実習を行います。実習期間はこれも3週間で、A類では1校に1人から3人となるため、各学級完全な個人での実習となります。内容は基礎実習、指導案作成、授業作り等を行います。学校業務に関して等、より発展的な内容も学びます。希望者は申請で島しょの学校への実習が出来ます。私はこの申請で八丈島の実習を行いました。

続いて、島しょでの実習の報告に移らせて頂きます。初等教育教員養成課程A類の理科専修の4年吉澤和也です。よろしくお願ひします。

私は東京都の伊豆諸島に位置する、八丈島の小学校で応用実習を行いました。八丈島には3つの小学校がありますが、その1つである八丈町立大賀郷小学校で実習を行いました。全校児童数は126名で各学年1クラスずつあり、大体1クラスが20人程度でした。実習は4年生のクラスで行い、4年生は23人いました。特別支援学級も1クラス5年生にありました。大賀郷小での実習を通して、多くのことを学ぶことが出来ました。その学びのうち、島しょならではのものが2つ、また、島での教育の課題と考えられることを2つ紹介させて頂きます。

まず学びについてですが、保護者や地域の方々との関わりが、学校教育の環境作りにかに大切であるか学ぶことが出来ました。そして八丈島という、地域の特色を生かした教育がどのように行われているかということを知りました。一方でこの地域の特色を生かした教育というものには、まだ課題も残っているように感じられました。またもう1つの課題として、児童の精神的な発達についても少し考えられました。

まず学びとして、保護者や地域の方々との関わり大切さについての学びを説明したいと思います。様々な自治体で地域全体での教育推進に取り組んでいますが、島は隔離された地域であること、また教員も島民して、完全な地域の1員となっていることによって、地域とより密接な関わりを築いていると思ひました。教員の方々も学級を超えて学校全体の保護者と関わっており、学校の生活や授業作りに協力を頂きました。

この写真が学校の校庭なんですけど、芝の校庭です。最近校庭の芝生化に取り組み始めたそうなんですけど、この管理も保護者の方々と一緒にやっているそうです。また、教材としてペットボトルを集めたりとか、僕は実習に使ったんですけど、そういうものも親御さんにお願ひをしてもらったりしました。

次に、事業の特色を生かした教育についての紹介です。小学校では身近な地域についての学習が多く分野で取り上げられていますが、八丈島には本当に多くの特産品があります。産業では特に、一番左側のくさやですとか、真ん中があしたばです。伝統工芸品では黄八丈という生糸の生産等がありますが、児童はそれに非常に詳しく知っていました。八丈島は観光地としても有名であるので、その観光

地として地域全体が推している特産品を子ども達の生活に結び付いていて、学習に生かされていることが分かりました。

次に八丈島の実習を通して、実感した課題ですが、先程学びとして紹介した特色を生かした教育には、僕は理科専攻なので、理科の観点から課題が少し見られました。八丈島は自然豊かで海も山もあって、八丈島ならではの自然が豊富にありました。一番左がその写真なんですけど、真ん中の鳥がアカコッコという鳥、真ん中が光るキノコです。一番右側がクロアゲハというアゲハチョウです。こういう、ならではの自然があるんですけど、児童には身の周りの自然がけっこう当たり前になってしまっており、理科の学習に結び付きづらひということが分かりました。この原因は恐らく、教科書のカリキュラムがある程度完成してしまっているため、地域の特色を混ぜ込んでいくためには、それぞれの教員が理科に対する知識と地域に対する知識の両方を兼ね備えていなければならないということが分かりました。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

「実習外の教育活動から」

東京学芸大学：3年 松下 光

実習外の教育活動を通して感じた「学び」の広がり、教育学部の学生が3年生にして、「教育」について考えはじめたきっかけ、ということで、松下光です。よろしくお願ひします。

サブタイトルにあるように、ここにいる皆さんのように、私は自分から学びを掴みにいくような人間ではありませんでした。しかし今では、この右側にある3つのような活動を行っております。この活動をするきっかけになったのが、小平市の公営塾での活動でした。概要はこんな感じになっております。対象は経済的に困難を抱えている子、学校で生きづらさを感じている子を対象に、中学1年生から3年生を教えていました。この体験から大きく3つのことを感じました。

1つ目は経済的に困難ということはどういうことかということをお考えました。言葉としては知っていたんですけど、実際に、クリスマスを知らないとか映画館で映画を見たことがないといった、子ども達から生の声を聞いたことで、凄く衝撃を受けました。ただそうなんだなと思っていたことが大きな問題意識になったり、課題意識に変わりました。

次に、子どもに寄り添うということです。ここに来る子は不登校とか母子家庭なんですけど、関わる大人の数が非常に少なく、そんな子ども達の居場所作りをすることに重きを置いて活動をしていました。しかし見て頂くと分かるんですけど、中学生でも、小学校の問題が出来ないような子がたくさんいました。でも、勉強だけをするような塾のような場にはしたくないということで、どう支援していくかになりました。このように子ども達と向き合っているうちに、私にある事件が起きます。大学が最高に楽しくなるって事件が起きます。どんなことでも教育の学びに

繋がるようになりました。色々な学びをどうやってあの子達に伝えようかなと考えるようになりました。そのことで以前なら、他の学生が個の対話で自分はただ、うんうんって頷いているだけだったんですけど、自分なりに意見を持ったり、疑問を持ったりするように変化しました。先程も述べたんですけど、自分の中で教育の学びや広がりを感じました。

そして行っているのがこの3つの活動になります。つながり交流部門cueというので、去年の4月に立ち上げから関わって、教育関係者以外からの社会人の方を学校にお呼びして、学生と交流する場作りを月に1回行っております。この朝活というのは、こういった活動の中で出会った仲間達と自分達で気になるテーマについて話し合うのを授業前に行っております。その他でも大学外での教育活動に凄く興味を持って、足を運ぶようになりました。公営塾での実体験があって大学での授業が面白くなって、自分でもするようになって、そのことが糧になって、色々な活動に展開していき、この流れが自分の学びの可能性を最大化してるんじゃないかなと思いました。

自分的に一番のポイントは実体験をしたということが凄く大きくて、先程もありましたけども、一番最初に体験するというのをこれから大学に伝えたり、学生に伝えたり、自分もどんどん体験していきたいなと思いました。終わります。ありがとうございました。

「小規模学校ボランティアから」

東京学芸大学：2年 古関 真菜

小規模学校ボランティアに行ってきた、2年の古関です。よろしくお祈りします。

私はまだ2年生なので、先程のお話にもありましたが、まだ実習に行っておりません。そこで教員の業務とか授業作りについてとか、現場のイメージといったものは、書籍とかニュースとか先輩の話から聞くしかありませんでした。そのため学校教育っていうものに対して、凄く漠然とした不安を持っていました。しかし、今回このボランティアに参加することで、学校教育をポジティブに捉え直すことが出来ました。ボランティア中に体験した3つの出来事を中心にまとめていきたいなと思います。

まず前提として、都市部にある大規模校も小規模校も同じ学校ではあるんですけど、小規模校にはこの1番と2番のような経験出来る性質があるなと感じました。この性質に学校というものに関わり始める初期段階において、学生がこの経験が出来るっていうのは、大きなメリットをもたらすなと感じています。

私が行った小学校の概要はこんな感じですいません、お手元の資料に変えさせていただきます。活動内容もボランティアだったので特に授業はせず、支援と視察を中心に行いました。後、放課後に学習を支援する機会を頂きました。

1日目、学習指導の追求経験について話します。ここは小規模校で児童の特性や学習状況について、色々な先生が

情報を知ってらっしゃるので、情報がとても入りやすかったです。そのため、しっかりと分析とそれに基づいた教材作成をしながら、放課後の学習指導や授業のサポートに当たることが出来、指導準備と実践サイクル、実践と児童の明かなステップアップというサイクルを上手くこなすことが出来ました。これは教員志望の学生にとって、凄く大きなステップアップに繋がったなと感じております。

2日目、複数の大人が関わる教育経験。地域の方がごく自然に理科の授業や生活の授業に顔を出して下さり、全教員が全生徒を見守る体制が定着しているということが、児童のことを相談出来る相手がたくさんいるっていう安心感を私にもたらししてくれました。

次に漠然とした、地方が都市部より劣るっていう、この方式の撤回って書いてあるんですけど、これは足を実際に運ぶことで、地方と都市部の相違点を整理することが出来ました。これは実際足を運ばないと出来なかった貴重な経験だなと思っております。

このようなことを通して、教員や学校の良さをたくさん吸収して、私は福島県から帰ってくる事が出来ました。これは実習を悪く言うわけではないんですが、大規模の40人の生徒を前に授業をしなきゃいけない3・4年の実習っていうのは、どうしても心のゆとりがなくなってしまうと私は感じていて、その実習の前に小規模の学校でじっくり子どもと向き合う経験をするっていうのは、自分の出来た、子どもの出来たをいっぱい見つめることになると思うので、凄く実習とかその後の実際の勤務にあたる糧になるなと感じました。このようなことを学生が小規模ですることによって、学生もその学生に教わる子どももメリットがありますし、地域や教育界においても大きなメリットがあるんじゃないかなと思いました。

ありがとうございました。

「墨田区桜堤中学校の支援の現状から」

東京学芸大学：2年 仲沢 実桜

仲沢実桜です。よろしくお祈りします。

まず先に、スライドを大きく変更して、今日差し替えて頂いたの、そこをお詫び申し上げます。

HATO環境教育支援プロジェクトとして、墨田区立桜堤中学校の支援を私は行っております。この活動は今年度で4年目となります。桜堤中学校は今回のテーマである、へき地・小規模小学校と異なる環境です。この活動について、今年度から新しく変わった点が2つあります。1つはサークルという形式をとって学生が参加しているということ。もう1つは、この今スライドで映し出されている4つのチーム体制を行っているということです。私はこの中の教材作成チームのリーダーを務めさせて頂いております。このチームは普段は授業や講義等で忙しく、学校現場に直接足を運ぶことは難しい学生が多く在籍しております。そんな学生でも間接的に学校現場と繋がりを持って、教育強化支援をすることが出来るという場所になっています。4

チームの1つの授業支援チームのメンバーが学校側の要望を私達に伝達して、教材をそれに合わせて作り、出来たものを学校にまた授業支援チームが届けてくれるというのが主な活動の流れです。それでも受ける要望が効果を望めないようであって、具体的にこれをこれだけ作りなさい、みたいな、本当に具体的で全てが拘束されたものではありませんでした。私達はより良いものを作ろうとして、作るものが途中から変わっていったりとか、模擬授業形式の勉強会を自分達ももっとそうした方が楽しくなるからって言って、一から計画を立てて組み立てたりとか。つまり、主体的に工夫したくなる活動を楽しむことが出来ました。

ここで感覚的なことを話します。本当に感覚的なので、イメージしてみてください。ハイスピードで行きます。コックを目指す人が2人います。左の人も右の人も座学勉強しておりました。左の人はまだ勉強をしています。その時右の人は、とりあえず作ってみようということで、実践経験を積む。次どうするか。左の人は何でやってるか分からなくなったり、あきたり、分からなくなってきたり寝ちゃうみたいなことも起きたりする。右の人はそれを実践経験したことを生かした座学勉強をすることが出来ています。じゃあ、そうやってコックになった人。左の人は初めて作った料理がこれです。さあ、あなたの食べたい料理はどっち、まあ、こっちでしょうね。ていうことをやっただけのものです。これは私がHATOの活動を通して実践経験を積んで、私が右のコックになることが出来るんだっていうのを感じた。これが案外、感覚的だけど本質的なかなと思って、あえて入れさせて頂きました。

3・4年での実践経験も確かにあるんですが、それについても、それ以前の経験を積むことで、更なる相乗効果が望めるんじゃないかと期待しております。しかし、今年度の最大の反省であるのがこういうことです。その課題を解決するための大きな可能性を秘めたビジョンを皆さんに提案したいと思います。希薄である学生と教員の関係を大学がサポートして、相互作用して生徒のためになることをする、このモデルです。是非考えてみて下さい。よろしくお願いします。

学生による報告Ⅱ 司会：長谷

次のグループ、発表の準備をお願いします。

それでは、次は愛知教育大学にお願いしたいと思います。

◇愛知教育大学

HATO連携大学における多様な学習と学び

「田原市フィールドワーク報告」

愛知教育大学教職大学院：

1年 荒木 柚衣・青木 結紀・出口 博菜
竹下 千尋・水野 萌

よろしくお願いします。

愛知教育大学教職大学院1年の竹下です。同じく水野です。同じく青木です。同じく出口です。 同じく荒木です。



よろしくお願いします。

私達は愛知県にある田原市というところで、9月の初めにフィールドワークを行ってきました。地域に根差した教育という観点から、そこで学んだことについて発表していきます。

まず、田原市について紹介したいと思います。愛知県はよくカニの形をしていると言われてるんですけど、その左手の部分、この部分が田原市です。県庁所在地である名古屋市からは、車で約2時間かかる距離にあります。見て分かるように、田原市は周りが海で囲まれています。そのため、田原市の名物には大あさり等、海で獲れるものが多くあります。また、他には恋路ヶ浜という浜も有名です。白く美しい砂浜が特徴で、日本の道百選等、4つの百選に選ばれています。恋にまつわる伝説が語られており、恋人の聖地とも呼ばれています。

そんな田原市で私達は5つのグループに分かれて、それぞれこのようなテーマでフィールドワークを行ってきました。本日はこの中からこの3つについて順番に発表していきます。

まず始めに、豊島大念仏踊りについての発表を行います。豊島大念仏踊りと言われても、よく分からないと思う方がほとんどだと思います。簡単に言うと、亡くなった方の供養を目的とするお盆に行われている行事です。念仏を唱えながら、上の方のような写真にあるような花笠と呼ばれるものをくるくる回したり、下の写真にあるように太鼓を叩いたりします。田原市無形民俗文化財というものにも登録されています。しかし、昭和62年からの20年間、後継者不足で一度休止してしまいました。その後、豊島大念仏保存会という方々の強い思いにより、平成16年に再興されることになりました。実際にこの豊島大念仏踊りを小学校の学芸会で行って、発表しているところがあります。それが現在スライドにも出ている、田原東部小学校というところです。この小学生達は学芸会だけではなく、お盆にも地域の方々のために豊島大念仏踊りを披露し、地域に貢献しています。しかし田原東部小学校では、豊島大念仏踊りを扱う機会というものが、主に学芸会での発表と地域のお盆に行われている活動に参加しているだけしかありません。そこで、この豊島大念仏踊りを教材としてより深く扱えないかと思い、今回フィールドワークを行ってきました。教科は

総合的な学習の時間と各教科の学習として扱っていきます。対象学年は小学校第3学年と第6学年です。単元や単元の目標はこの通りです。豊島大念仏踊りを題材にして、フィールド調査をする中で学んだことについて、主に3点紹介していきます。

まず、学んだことの1つ目は、現地に足を運び調査をするということの大切さです。私達の当初の予定では田原東部小学校、田原市役所、田原市図書館の3つのところに行く予定でした。田原東部小学校で、光福寺で豊島大念仏踊りを行っているという話を聞き、そこで豊島大念仏踊りを再興するきっかけとなった、元会長さんの自宅の場所や電話番号を教えて頂き実際に会いに行き、その方から現会長さんの連絡先を教えて頂き、実際に会うことが出来ました。また、田原市役所に行った時には、田原中部小学校というところも田原まつりというお祭りについて取り組んでいるということで、この小学校と連絡をとって来て、お話を聞きに行くことが出来ました。このように様々な人との繋がりや人との広がりの中で、豊島大念仏踊りについての学びが深まっていきました。特に保存会の2名の方に会い、豊島大念仏踊りに対する思いや子どもへの願いを直接聞いたことは、貴重だったと思います。子ども達が地域教育を行うにあたって、このような人との繋がりを教師が作っておくということも、フィールドワークを行う上で大切なことであると実感しました。

2つ目の学びは、地域と学校が相互に支え合う関係であるということです。学校は地域の人が受け継いで、伝統の継承を子どもが行うということ。地域は学校にとって、地域に根ざした教育を行うことが出来るという関係にあります。このメリットは最終的には、子どもにとっての学びや成長に繋がっていくことが重要であると考えます。

最後、学んだことの3つ目は、調査をもとにした授業計画を作るということです。教師がせっかく行ったフィールドワークを無計画で子どもに提示するのはもったいないということから、調査をもとに子どもとどのように教材に出会わせ、子どもがどのような姿になっていって欲しいのかを計画的に考える必要があります。授業で子どもの学びになってこそ、フィールドワークをした意味があると思うからです。そこで年間指導計画を考え、いつ、どのような活動を行うのかを詳しく考えていきました。ポイントとなる点は、地域の方々に貢献する内容が多いということと、6年生が5年生に豊島大念仏踊りを教え、引き継ぐ経験を入れたところです。総合的な学習には教科書がないということや、6年生が5年生に教えるということ、6年生にとって自信になるということがこの活動の利点だと思えます。

それから田原中部小学校で頂いた、総合的な学習の時間の研究紀要を参考にして、私達で考えた単元計画をもとに、このような年間指導も考えました。こちらは、お配りしてない方もいるんですけど、冊子にも詳しく載っているので、そちらをご覧ください。こちらの年間計画には、豊島大念仏踊りだけではなく、総合的な学習を年間で考えたうちのど

の時期に、この豊島大念仏踊りをいれるかということを考えてことにメリットがあると思います。豊島大念仏踊りの発表は以上です。

それでは次に、吉胡貝塚史跡を用いた地域の歴史学習に移ります。目次は次のようになっています。

まず、吉胡貝塚について説明をします。吉胡貝塚は国指定史跡で、中部日本においては屈指の広さを誇る史跡になっています。特に吉胡貝塚では、ここに挙がっている3点が特徴的です。詳しく説明していきます。

まず1点目は、19号人骨、通称「ヨシ」という人骨です。この人骨は左腕に7個、右腕に4個のサトウガイで作られた貝輪をはめています。または、川の周辺にベンガラという水銀朱が撒かれた状態で埋葬されて発見された人骨です。この人骨は貝輪を大量にはめていることと、また、ベンガラが撒かれているという点が他の人骨に比べて非常に珍しいです。

2つ目は、盤状集積墓です。この埋葬方法は三河湾周辺でしか見られず、見つかっている例は10例程しかないほど珍しいものです。この埋葬方法は再葬であることは間違いはないのですが、何故このような形になっているのか等、まだ詳しいことは分かっていません。

3つ目は先程も触れましたが、貝輪についてです。貝輪は名前の通り貝で作った腕輪のことです。縄文時代後期は主にベンケイガイという貝で作られた貝輪が多く出土していました。さっきの19号人骨の腕にもこのようにあります。

次にカリキュラムの開発を通じた学びについて話したいと思います。

まず1つ目として、現地に赴いて調査をする良さについて学ぶことが出来たことです。実際に調査をすることで、実際の貝塚の大きさや印象を知ることが出来ました。そのことによって教材研究が深まり、新しい発見が得ることが出来る等、教師にとっても子どもにとっても、良さがあることを知ることが出来ました。特に今回のフィールドワークでは、この写真のように実際の埋葬方法について視覚的に理解をすることが出来ました。

2つ目の学びとして、直接お話を伺うことが出来るということが挙げられます。実際に話を聞くことで、様々な学びを得ることが出来ました。今回のフィールドワークでは、このさっきも挙げた盤状集積墓の写真なんですけど、これは平成28年1月に新しく出土した盤状集積墓の写真になっていて、このように新しい情報等は現地に実際に行ってみないと知ることが出来ない、ということフィールドワークによって知ることが出来ました。

学びの3つ目です。3つ目は歴史的文化財を教材とすることの良さについて、学ぶことが出来たことです。今回、教材開発にあたって、田原市の子どもにとって身近にある吉胡貝塚史跡を教材とすることで、歴史をより身近なものとして感じられたり、資料館等を実際に調査することによって、実感を伴った学びが出来たり、地域に根ざした学習が

可能になることを学ぶことが出来ました。

学びの4点目です。学びの4点目は、調査をもとにした授業設計です。今回授業の中に取り入れた工夫としては、1点目、揺さぶりです。子どもの興味を引き出す学習課題。2点目は、現地調査です。子ども達の問いを追求する授業構成。3点目、討論です。子どもの考えを修正・発展させる授業があります。これらの工夫によって現地調査や学習課題を通して、吉胡貝塚について1人ひとりが考えを持ち、地域に誇りを持つことが出来る子どもの育成を目指した授業設計を行うことにしました。また今回は、歴史学習だけにとどまらず、地域学習の視点を取り入れた授業にしていきたいと考えました。

参考です。宮本は地域社会の教育的意義について、この5点を挙げています。更に、地域社会における教育能力のポイントとして、この5つを挙げています。吉胡貝塚は1、生活空間としての地域社会。3、歴史空間としての地域社会。5、想像空間としての地域社会の性格を持つものであり、ポイントとしては、1、実物や本物から学ぶことが出来る。2、具体的・実感的に学ぶことが出来る。4、地域社会の一員として共感的に学ぶことが出来る、という視点が重要になると私達は考えました。

以上のことを踏まえて、単元計画を作成しました。詳しくはさっきお配りしています冊子をご覧ください。先程述べた1点目、揺さぶりです。2点目、現地調査です。3点目、討論を意識して作りました。

2時間目になります。既習事項の貝塚と吉胡貝塚を比較することで揺さぶりを取り入れました。

5限目です。シェルマよしご、(吉胡貝塚の資料館)に、実際に行って学ぶという現地調査を取り入れています。

そして、最後8限目。貝塚はゴミ捨て場なのか、墓場なのか、というテーマの討論を行います。以上が学びを踏まえた単元計画になっています。私達の班の学びは以上になります。

続きまして、田原を食べよう、食育教材作りの発表をさせて頂きます。

この地図をご覧ください。田原市は温暖な気候と全国トップクラスの日照時間を誇り、農業生産額は全国第1位で、キャベツ、ブロッコリー等が特に有名です。その他にもトマトやスイカ等、農産物がとれます。私達はこの田原市の豊富な農産物に注目して、食を生かした教材開発を行いました。私達はフィールドワークの中で、田原市給食センターを訪れました。この写真は給食を作るときに使う大型の鍋です。子ども達がこうした調理器具を実際に目の当たりにし、調理の過程について給食センターの人から話を伺うことで、自分達が普段食べている給食がどのように作られているのかを学ぶことが出来ると実感しました。

次に単元の目標です。給食センターへのインタビューやにんじんの会の代表の話を通して、食べ物大切さを実感し、地域に対する愛着を持ち食を通して、自分達を支えてくれる人達への感謝の気持ちを持つことが出来ることを目

標に設定しました。

目標にあります「にんじんの会」というのは、給食センターに田原の食材を提供してくれている地域の生産者団体です。この目標を設定した根拠としては、食材の調理や生産に関わる人へのインタビューを通して感謝の気持ちを持つことが出来、そしてこの2つの経験から、自分達の住む田原という地域に愛着を持つことが出来ると考えたからです。

この教材を指導するにあたっては、4つの段階を設定し、スモールステップで進めていきます。ステップ1では田原の食材を調理している給食センターを視察し、インタビューを行います。ステップ2では、給食センターに田原の食材を提供してくれている、にんじんの会代表の方から話を聞きます。このステップ1とステップ2で調理をする、生産をするという2つの立場の話に触れ、感謝の気持ちを持つようにします。そして、ステップ3、ステップ4では、自分達で田原の食材を使ったメニューを考案し、実際に調理をします。その中で直接田原の食材に触れ、調理の大変さを実感し、生産者、調理者、地域に対する愛着や感謝の気持ちを深めることが出来るようにします。

私達のグループでは地域教材の開発で、次の3点を学びました。

まず1点目は、体験活動を取り入れ子ども達の主体性を大切に教材を作ることです。ラーニングピラミッドをご覧ください。ご存知の方もいるかと思いますが、これは各学習方法による学習定着率を示しているものです。この中の自ら体験する、つまり体験活動は、定着率が75%と非常に高いことが分かります。このことから体験活動を地域教材に取り入れることは、子どもの興味の幅を広げ、学びへの威力を引き出し、主体的な学びが行われるようになると言えるのではないかと考えました。

2点目は、地域の特色や良さを積極的に教材に取り入れ、子ども達が地域に対する愛着や誇りを持てるようにすることです。地域教材は地域特有のもの、ことが素材となり、子ども達にとって身近で、その学校でこそ価値を発揮するという点で、一般的な教材と異なります。従って地域教材を使うことで、より親近感や愛着、誇りを持つことが出来るようになると思います。だからこそ、地域教材を開発するときには、その役割や特徴を踏まえて、独自性のある素材を教材として開発していきたいです。

3点目は、収集した情報をねらいに合わせて取捨選択することです。1つの素材から様々な教材が開発出来るため、素材の下調べの段階で様々な学びの可能性を考えながら、丁寧に行うことが大切ということも感じました。

以上で私達3グループの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅱ 司会：長谷

ありがとうございました。

それでは最後のグループですね。和歌山大学です。お願

います。

◇和歌山大学

「へき地・複式教育実習」及び「小規模校活性化支援事業」を通して

和歌山大学：4年 山下 優也



和歌山大学教育学部の山下優也です。よろしくお願ひします。

私は小規模校実習に関して、2つの実習、これがへき地・複式教育実習と小規模校活性化支援事業に参加しました。実習校は、和歌山県の広川町立津木小学校というところに行きました。学校の概要については、ご覧頂きたいと思います。それでは今から、小規模校活性化支援事業とへき地・複式教育実習で、私がどのような活動を行い、何を学んだのかについて発表したいと思います。

まず小規模校活性化事業では、通常は1・2年次の9月に1週間行きます。その中で主な取り組みとなるのが、運動会支援が主な取り組みとなります。こちら運動会練習の前の写真と、下の方が運動会前日の学校の全員で円陣を組んでいる写真です。この津木小学校の運動会の特徴としては、小・中合同の運動会となっています。小学校だけではなく、中学校とも合同で運動会を行います。その中で実習生としての役割は、安全管理や人数合わせ、等の役割を担います。そういった活動の中で、私は指導方法の習得をすることが出来たのかなと思っています。運動会を指揮して下さった先生の実地指導方法がとても参考になりました。運動会の練習前にはボードを用意して、それを子ども達に今回の運動会練習の目標は何なのかを伝えていました。これなら子ども達も認識して、授業を進めていくことが出来るなどと思い、そういったところの学びもありました。

それ以外にも、授業サポートということを学びました。複式学級における間接指導中の学年の学習支援を行いました。その中で個々の能力を見極める必要性というのを感じました。問題をすぐ解けてしまう児童もいれば、つまづいてしまう児童もいる。その中でしっかり能力を見極めて、適切な支援を行っていくことが大事であると感じました。また、給食指導を行ったり、休み時間には子ども達と遊んだり、そういった中で信頼関係というのを築くことが出来ました。また、全児童に関わるための配慮が必要であるか

などと思いました。小規模校ということで、とても人数が少ないので、全ての児童と関わることが出来ます。そういった中で特定の児童とばかり関わってしまうと、それは差別に繋がってしまったりするので、バランス良く子ども達と関わるようにした方が良いのではないかと考えました。

小規模校活性化支援事業ならではの学びとして、3つ挙げたいと思います。まず1つ目が、複式授業に参加、支援することが出来たことだと思います。一般の主免実習では、複式授業が経験出来なかったので、それが1つの学びでした。また、全学年を総合的に支援することが出来ました。特定の学年を受け持つという形ではなく、バランス良く全学年を見ることが出来たので、その中で学年ごとの発達段階というのを学ぶことが出来ました。

最後に、運動会を通して、異年齢交流の利点を把握出来ました。高学年の児童が低学年の児童をサポートしている様子をたくさん伺うことが出来たので、そういった中で、児童同士の支え合いということを見ることが出来ました。

次に、へき地・複式教育実習について説明したいと思います。大学3年次の2月に2週間行きます。へき地・複式教育実習ですので、やはりメインとなってくるのが授業実践です。

こちらは、実習生による算数の研究授業の様子を書いています。3桁かける2桁の計算の研究授業として行いました。人数が少ないので、子ども達の数よりも教師の数が多いということで、とても緊張した記憶があります。慌ててしまった思い出があります。他にも授業として、こういったことをやらせて頂きました。バトミントンの授業をさせて頂きました。私は和歌山大学でバトミントン部に所属していますので、得意分野を発揮しての指導が出来ました。そういった中で、子ども達との距離を縮めることが出来たのも1つの良い経験でした。

へき地・複式教育実習のもう1つの重要な学習として、地域学習というのがあります。へき地・複式教育実習は2週間の実習ですので、その休日を利用してその地域に入り、地域で子ども達が何を学ぶのか、社会科見学等を今どのように生かしていくことが出来るのか、そういったことを学ぶ地域学習を行いました。湯浅醤油で有名な湯浅に行きましたが、知名度的にはどうですか、分からないですか。考えてみて下さい。なるほど、オーケーです。他にも稲むらの火の物語で有名な防災教育センターにも伺いました。11月5日が世界津波の日に認定されているんですが、その由縁となった土地になります。実際にその中で子ども達が何を学ぶのかということ調べに行くわけですけど実際は、私実は和歌山県出身ではなくて、三重県の出身なので、完全に観光客化して楽しんでいました。

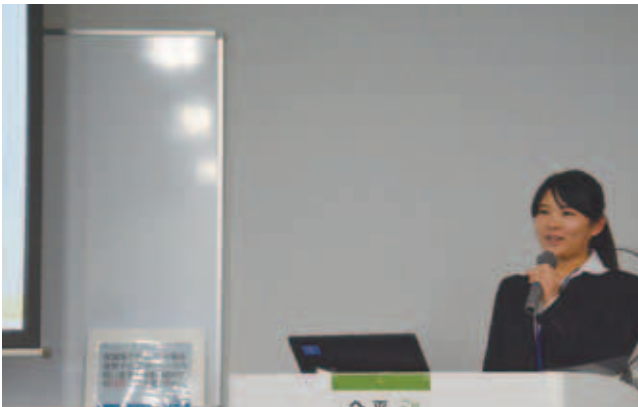
へき地・複式教育実習の学びとして、最後にまとめさせて頂きます。まずは、授業実践の経験が出来たことが大きかったです。また、小規模校における個に応じた指導が長所になると感じました。1人の先生に対して子どもの数がやはり少ないので、先生は子ども一人ひとりの能力を理解

することが出来ます。それを授業計画に生かしていくことが出来ます。そういった、個に応じた指導の良さというのを実感することが出来ました。2週間実習の休日を利用した地域学習の学びも多かったです。地域の特性や課題というのを認識することが出来て、教務に生かしていくということを学びました。

最後になるんですが、この実習というのが児童宅にホームステイして行く実習で、朝学校に行く際には、ホームステイ先の子どもと一緒に学校に行き、帰ってきたら子どもと晩には遊んだり、一緒にご飯を食べたりするという経験をしました。その中で、学校と自宅での児童の様子の違いを実感することが出来ました。学校ではリーダーシップを発揮して、学校を引っ張ることが出来るような児童でも、家に帰ってきたらお母さんに甘えることがあったり、気の抜けた表情をすることがあったり、そういった、学校と自宅での児童の様子の違いというのをとても実感することが出来ました。これは現場の先生方でも少し難しいことなんではないかなと思い、とてもいい経験が出来たと思っています。また、保護者の立場を理解出来たということで、その保護者というのが、かなり学校に要望や改革を要求するような保護者さんで、この話をご飯の際に聞く時には、こういう立場の考えもあることを理解することが出来ました。

「小規模校実習」で学んだこと

和歌山大学教職大学院：1年 東 真那



最後になります。こんにちは。所属名は凄いい長いんですけど、和歌山大学教職大学院の1回生です。東真那です。よろしくをお願いします。

教職大学院は去年4月に出来たばかりなので、私が1期生となります。ですので小規模校実習は、教職大学院で取り組むのは初めてとなりました。実際に行った場所なんですけれども、本州最南端である、和歌山県の東牟婁郡串本町という所へ行きました。トルコ・エルトゥルル号遭難事件というのはご存知でしょうか。また、クジラで有名な太地町が隣にあります。教職大学院が5名なんですけども、2名と3名に分かれて、串本町立出雲小学校へ2名、また田原へ3名行かせて頂きました。宿泊先なんですけれども、先程の学部生は児童宅へホームステイという形であったんですけども、私達5名は共同生活として、最南端にある

潮岬青少年の家で共同生活を致しました。

では学校の概要は、お手元の資料の通りですけれども、右端の下の写真に注目して頂きたいと思います。こちらの真中の黒のスーツを着ていらっしゃる方、5代目ペリー、マシュー・カルブレイス・ペリーさんの5代目にあたる方なんですけれども、実際に1791年に黒船が浦賀に来られたことは、皆さんご存知かと思います。ただ、その62年前に日米の初の接触として、串本にアメリカの船が来てたんです。そのこともあって国際交流として串本町は、アメリカやトルコとかなり関わりがあって、実習期間中にも5代目ペリーさんが実習校である田原小学校へ来校するという、私も握手してもらったり、写真も撮らせて頂きました。それも串本町ならではの国際交流の活動をされてるんじゃないかなというふうに思います。これも特徴の1つだと思います。

では、私を感じた小規模校特有の課題と工夫についてなんですけれども、私が行った田原小学校は4年生の児童が1名、課題は挙げている通りなんですけれども、実際に私達実習生3名を前にして、「じゃあ自己紹介してみて。」「何言えいいんか分からへん。」「上手いこと言われへん。」、凄い困った表情を見せたんです。あー、学校を一步出た時に、子ども達こんな表情をするのかな、困った表情をするのかなというふうに、課題を実際に目にすることがありました。その課題を克服していく、この3つの課題を克服していくために実際に行っていることです。教師が子どもの考えを聞くようにしています。担任の先生おっしゃってました。また、去年4年生だった子ども達のノートを保存しておいて、この4年生に考えさせる。他の児童のノートを利用するということがされているとおっしゃっていました。

最後の学び合い活動は、田原小学校で行っている活動なんですけれども、学び合い教室というところに全学年が集まってきます。それぞれの学年に合わせた、主に算数科の問題を解きます。式と答えは勿論なんですけれども、解き方を文章や絵、図を使って解いた後で答え合わせをします。答え合わせは自分で行うんですけれども、答え合わせをした後で、他の学年に自分の解き方を聞いてもらう、上のお兄ちゃん、お姉ちゃんに聞いてもらう。下の子に聞くのは、ちょっと算数科だったら・・・って感じなんですけれども、他の学年との交流の場というものを学習面でも生かしているというところが田原小学校で工夫されているところでした。

そして実際に最終日には、私は一日担任を1年生と2年生の複式学級でさせて頂きました。そこで単式授業との違いを感じました。前半の発表の中でもあったんですけども、学習指導案作り、凄く難しかったです。実際に自分が、こんなわたりにしたいいかな、直接指導したいいいかなというものを指導案に反映していくってことの難しさ。そして、実際にした時の子どものつまづきって、こんなところやったんや、全然分かってへんかったなというふうに、授業実際にすることで思いました。実際に行っている先生は、3

年生の方に行ってる時に、耳だけ4年生の方に向いてる時あるねん、そんなこと出来ひんかったなっていうふうに。実際に自分が行うことで困難さを感じました。

そして、小規模校では異学年交流を毎日行われています。その中で、上級生が下級生の指導をしていく中で、去年自分は習ったことだから復習や学びの深まりに繋がりになったり、あ、僕ってこんなことを教えること出来るんやって、自分のことを自分で認める心が育ったり。また、下級生から上級生へ、こんなお兄ちゃん、お姉ちゃんがいたらいいな、来年こんなん学びをするんか、楽しみな声。わくわくした思いを持たせることが出来るのが、異学年交流だなというふうに感じました。

実際の私が、この実習をどう今後に生かしていくかというところなんですけれども、異学年交流を実際に小規模校でないところでも反映していきたいという思いがあります。私は和歌山県ではなく大阪府出身なので、小規模校もあるんですけれども、実際に大きい学校でも限られた時間の中で、異学年交流をどう活動していくべきか、社会性のあるコミュニケーション能力や、また、自分が自分を認める心をどう養っていくか、どういう活動をしていけば、その力を養うことが出来るのかというふうに考えた時に、実際に教員になった時に考えていきたいところだなというふうに思っています。上の写真なんですけれども、学習の中で子どもが一番最初に、今日の学習の見通しをつけること。田原小学校では全学年がやってたんですけれども、これは小規模校だけではなく、大きな学校でもしていくべきだなというふうに思いました。子どもが見通しを付けて、自分が今この活動は次の活動で繋がっているんだという実感しながら学習をすることは、子どもにとって大切なことというふうに思っています。3つ目です。実際に朝の職員打合せにも出させて頂きました。先生同士の連携が凄く出来てるな、この連携とか信頼関係は凄い大切なことというふうに感じる事が出来たので、私はまた2年次で実習もあります。またその先で、教員としてやっていきたいという思いもあります。そこに反映していけるような心持ちであります。

以上で発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

学生による報告Ⅱ 司会：長谷

はい、ありがとうございました。

4つの大学の学生の皆さん、発表ありがとうございました。自分達の経験したことをプレゼンにまとめて、自分の言葉でしっかりと発表出来たんじゃないかなと思います。

最後に、発表して下さった学生の皆さんに大きな拍手で終わりたいと思います。

総合司会：戸田

司会の長谷先生、ありがとうございました。

それでは少し早目に進行しておりますけれども、次のプログラムに入らせて頂きます。



この後は、18時15分までワールド・カフェ方式による多様な交流ということで、この後、進めさせていただきます。

改めて自己紹介をさせていただきます。私は、北海道教育大学釧路校、へき研のセンター員、戸田と申します。

それではこの時間、どのようなことをするか、若干複雑でありますので、画面を準備して参りました。画面と私の口頭と合わせて聞いて頂ければと思います。

この時間は、只今4大学、大阪教育大学、東京学芸大学、愛知教育大学、そして和歌山大学の皆さんにご報告を頂きました。時間の関係上、こちらの全体の場合で質問や意見交流をすることが出来ませんでしたので、各大学ごとにブースに分かれて、質問や意見交換を行う時間、そのようにさせていただきます。学生の皆さんのご協力によりまして、意見交換の時間が予定より少し長く持てそうなんです、この後、17時45分まで学校ごとのブースに分かれて、意見交流を行います。ここで報告をして頂きました4大学の学生さんは、それぞれのご自身のブースに着席を頂いて、それ以外の発表されていない参加の皆さんは、ご自身が意見交流をしたい、質問等をしたいと思う大学のブースにご自身で選んで頂いて、ご着席頂ければと思います。

じゃあ、それぞれのブースはどこにあるのかという会場のご案内です。こちらの出入口を出て頂きましたら、向かって右手が教室2という所になります。そちらに愛知教育大学のAブース、東京学芸大学のBブースを準備しております。そしてこちらを出て頂いて、左手すぐ大阪教育大学のCブース、和歌山教育大学のDブースを準備しております。繰り返しになりますが、それぞれ意見交流をしたいと思われる大学のブースに速やかにご着席頂ければと思います。

先程の報告Ⅱのところでも長谷先生からもご紹介を頂きました、付箋紙についてでありますけれども、それに書いて頂きました質問、意見は、各ブースに模造紙が準備をされています。各大学のブースのその模造紙に貼り付けて頂けたらと思います。その付箋紙で出されました質問や意見、それを参考にしてそれに基づいて、司会者が時間まで進行を行います。当然、付箋紙に書ききれなかった質問等もあるかと思いますが、また新しい付箋紙に書いて頂いても構いませんし、ブースで直接口頭でお聞き頂いても構いません。いずれにしても、それぞれのブースに北教大の

教員が進行役としておりますので、その進行に沿ってご参加を頂ければと思います。17時45分までブースごとでの意見交流を行いまして、17時50分から、今皆さんが座って頂いておりますこちらの部屋、教室1で全体交流を行います。ですので司会者の皆さん、そして、ご参加の皆さん、17時45分には必ず終了して頂いて、50分までにこちらのお部屋にお戻り下さい。

そしてその後、各大学の学生さんの代表1名から2分程度で、どんな意見交流があったか、報告をして頂きます。ですので、4つの大学の学生の皆さん、代表者を1名決めて頂きまして、その1名の方が17時50分からこちらで最後報告をして頂く、役割分担をして頂ければと思います。

そして、このような全体交流の後に、本日お忙しい中お越し頂いております、北海道立教育研究所、企画・研修部長の中澤美明様から、ご講評を頂きます。このような予定としております。

ワールド・カフェ方式による多様な交流のまとめ

総合司会：戸田

ワールド・カフェでの交流を踏まえて各大学から2分程度でご報告を頂きます。ご報告を頂く順番ですけれども、愛知教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学、和歌山大学のこの順番で、ご報告を頂きたいと思っております。

私の方で2分経ちましたら、なんとなく優しく鳴らしますので、まとめて頂ければと思います。

それでは、愛知教育大学の代表の方、ご報告をお願い致します。



愛知教育大学

ありがとうございました。愛知教育大学の青木です。私達の発表は少し異色だったかなと思うんですけど、へき地での地域での教材開発やカリキュラム作りというのをテーマに話をさせて頂きました。私達が行った田原市というのは、実は、豊島の念仏踊りですとか、ああいった歴史学習というのがカリキュラムとして整っていません。授業でも全て、授業外活動として行われています。それを授業の一つとして、カリキュラムとして組み込んでいくのにはどうしたらいいのかなっていう、教育課程の組み込みっていう

のを地域のフィールド学習を通してカリキュラムとした発表です。

小学校の先生をされる方多いと思います。自分が知らない所に派遣された時に、社会科の授業でどうしても地域のことを教えなければいけないというところが出てくると思います。初めての地域でどうやって地域のことを知って、それを社会科の授業にしていくのか、というところで凄く不安になる方もいらっしゃるんじゃないかなと思います。でも教師になった時には、自分達でカリキュラムを作ることが必須になってきます。そういったカリキュラムの作り方っていうのは、学校で学べるのかなと思うんですが、実際にそれが出来るのかと実際にやってみたってというのが、今回の発表になりました。そうやって自分達で調べていくことで、子ども達に、じゃあ調べ学習をしてみよう。どうやって調べたらいいんやろう、っていうことを教師の言葉で伝えられるようになると思います。後、地域の人にインタビューをしてみようって言った時に、どんなことを聞いたらいいんやろう、どんなふうに聞いたらいいんやろう、ということも教師が実際に試みることで、子どもに社会科の授業を深める一つになるのかなと思います。

今回はこういう提案という形になりましたが、私達が教員になった際に生かせるものとして、実践として、まだこれからの学びで深めていきたいと思っております。ありがとうございました。

総合司会：戸田

ありがとうございました。東京学芸大学の方、お願いします。

東京学芸大学

東京学芸大学です。色々な話が出たのですが、今は2つのことを取り上げて、説明したいと思います。

まず、教員と学生の協力についての話が出ました。色々な教材を作るとか、ワークシートを作る中でどういうふうに協力していくかということについて、教員や教育に関係する研究機関、また、学生が集まる場所を用いて、話し合いや情報交換の場を取ることが必要じゃないかと。また、ワークシートや教材を学生側から自らアプローチをしていくことによって、より発展的な内容。また、学生の学習、また現場の教員の新たな知見を得るとか、そういうことが出来るんじゃないかと話になりました。

2つ目として、へき地での精神的、社会的発達の援助は、どのようにしたらいいかという話が出ました。それについては、へき地の生徒が外に行って、そういうストレスを抱えたりしているという話を体験をもとに話が出て、そういうことをどういうふうに取り組んでいくかということについては、へき地の人が外に行って学ぶということだけでなく、外から招待して自分の地のことを紹介する、または観光するとか、そういうことをするのもいいんじゃないかと話が出ました。アウェイな状況じゃなくホームな状況で、

自分がどういふふうで紹介出来るか、自信を持ってプレゼン出来るかということが大切ではないかというふうになりました。それによって自分自身やふるさとへの自信を持つことによって、将来自分がどういふふう生きていくかということを考える方向転換が出来るような、種を撒いていくことが出来るんじゃないか、それが教員に出来るんじゃないかという話になりました。以上です。

総合司会：戸田

ありがとうございました。続けて、大阪教育大学の方、お願いします。

大阪教育大学

大阪教育大学の中澤です。

質問の中で多かった概要として、1つ目が遠隔地実習全体のことについてと、2つ目は企画授業について。3つ目、多かったのが家庭訪問について。この3つについて簡単に紹介させていただきます。

1つ目、遠隔地実習の全体の概要なんですけれど、遠隔地実習はオプションであって、割と人気なので志望者も非常に多く、30人、40人くらいの学生さんから応募があって、その中から選抜という形で、各学校から5、6人くらいになるように選ばれる形です。費用は基本的に実費なんですけれど、自分達で宿泊した所は学校の宿舎であったり、後は地域の公民館であったり、そういう形で生活させて頂きました。

2つ目、企画授業なんですけれど、企画授業については基本的に教科の授業で、その教科の授業は何をするかっていうのは事前に決まっているものでもなくて、実際に実習先に行って、その先生達と相談しながら、実際にどのような授業を行っていくのかっていうのを数日かけて相談して、行うという形です。僕が行った川口小学校では、少し特殊でこだわりの授業とあって、1人の子どもに対してメッセージを届けるという形で行う授業も1つだけ用意されていました。

最後に3つ目、家庭訪問なんですけれど、この家庭訪問についての質問は凄く多かったんですけれど、僕も何回も付き添わせて頂いて、実習生の中にはクラス全員の子の家庭訪問をした人もいましたし、僕の場合は全員は行けなかったんですけど、先生達は何で家庭訪問に行くのか、実際に行ってどういふ成果があったのかっていうのを学校間全体で共有していて、結束力が凄く強いなというのを感じました。僕が行った川口小学校では、チーム川口という形で全員で子ども達と向き合って支えていくという、そういうスタンスだったので、やっぱり時間も大変で、夜の9時ぐらまで家庭訪問している先生達もいらっちゃったし、凄く大変だと思うんですけど、実際の僕が教育現場に出たときに、それを実践出来るかと言われたら自信はないんですけど、その地域であったり、後は保護者、家庭に対して積極的に関わっていく姿勢は忘れないようにしたいと思いま

した。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

総合司会：戸田

ありがとうございました。では、和歌山大学の方、お願いします。

和歌山大学

和歌山大学の東です。主に3点についてです。

1つは、子どもにとって実習生ってどんなやろうっていうふうに皆で話し合いました。やっぱり、子どもと関わりたいという思いがあるからこそ、時間をたくさん使って子どもと関わっていくと、教員としてではなく、やっぱり学生として見られることが多いなっていうふうに感じるところがあるよねっていう話をしました。

2つ目です。他大学の発表を聞いて、自分のところにどんどん生かしていきたいっていう思いを他の方々もお伺いしました。和歌山大学の2人としては、島への実習いいなというふうに思いました。島で実習することによって教員も同じ地域で子どもと生活しながら、また、学校でも生活しながらということの環境を知ることって、凄いいんじゃないかっていうふうに2人でも思いました。

3つ目です。和歌山大学の学部生はホームステイをしていると、発表の中にもあったと思うんですけど、実際に北海道教育大学の1年生の方々にもホームステイか、また教員の住宅か、どちらがいいやろって話も出ました。ホームステイによっては家庭の取り組み方というか、実際に家に帰って子どもと関わる時間が多いんですけど、その反面、授業作りの時間を取ることが出来ない、どっちがいいやろ。学校外の子どもの様子を知ることがいいのか、また、授業作りに集中する方がいいのか、自分やったらどう思うっていう話が話し合いの中にありました。以上です。

総合司会：戸田

ご報告頂きまして、ありがとうございました。

それではここで、全体講評を頂きます。ご講評を頂きますのは、北海道立教育研究所、企画・研修部、部長の中澤 美明様でございます。それでは中澤様、よろしくお願ひ致します。

【講評】

中澤 美明 氏

(北海道立教育研究所 企画・研修部 部長)

皆様方、本当にお疲れ様でございました。最後に10分程お時間を頂いておりますので、お話をさせていただきます。

まず、今日お聞きして学生の皆さんの前向きな姿勢と志の高さには本当に感動しておりました。蛭田センター長もおっしゃっていましたが、これは全ての学生に聞かせたいくらい、素晴らしい発表だと思っております。

画面をご覧ください。この地図は北海道の新聞に最近出



てました。北海道の広さというのは、15の府県が入るぐらいの広さなんです。ところが、北海道の学校数をご覧下さい。小学校は15の府県をたすと約6000なんですけど、北海道は約1000です。つまり同じ面積の中にある学校数は6分の1です。中学校も6分の1です。子どもの数は10分の1です。ということは、北海道は凄く広い中に人口が少ないし、学校も少ないのです。本当に広域で分散化していて、小規模の学校が多い。これからは益々こうした状況が進んでいく。そういう中で、このフォーラムを北海道で開催して頂けることは、本当に意義があることで、ありがたいと思っています。発表の内容もさることながら、こういうフォーラムをやって頂き、皆で考えることは、ありがたいことだと思って聞いておりました。発表の中には本当に良いところもたくさんありましたけれども、その一部を皆さんにご紹介したいと思います。

大阪教育大学です。文章化によってアウトプットしている点が素晴らしい。これはこれからの学生、先生にとっても、大事なことだと思います。パワーポイントを作るのもいいのですが、文章にするということは、自分で考えをまとめて、相手に分かってもらうという作業です。非常に価値あるものです。1人ずつ簡単にコメントしていきます。

尾西さん。チームのメンバーとの交流で、より多くのことを吸収、協議をするということを大切にされています。これは今、学習指導要領の改訂等で示されているチーム学校だとか組織マネジメントの基礎です。この体験で共有することの良さを学んで頂ければと思っています。発表の中で出ていました、少人数の利点と難点についてですが、私は、1人の生徒に対して、40人学級と同じスタイル、進度の授業をするべきなのかと疑問に思っています。凄く進んでいる子は、その子に合わせた進め方をしていいのではないのでしょうか。それぐらいの柔軟性を持って頂きたいと思っています。

続きまして、阿部さん。思いだけで指導案を書いていた。何か漠然として、何を理解して欲しいか分からなかったということがレジュメに書いてありました。これは本当にいい気付きだと思います。授業の肝に気付いた。つまり、何を育成するのかということにきちんと気付いたということです。それがないと、何か漠然とした授業になってしまうということです。また仲間の大切さを知ったと発表されてま

した。

続いて中澤さんですけども、「働かされていると思っている人は、誰1人としていなかった」「その姿勢が自分にとって衝撃的で、本当に素敵だった」という発表がありました。そういうロールモデルと出会ったわけですね。私は優秀な教員に出会うことが一番自分の力を伸ばすことだと思っています。これは国研の調査です。「優秀教員に変化や影響を及ぼしたことは、何だと思えますか。」という問いに対して一番多い回答は校外研修じゃないんです。それも大事なんですけど、一番は校内で優秀な教員と出会ったことです。それが40%。つまり自分の目標となる教師に出会うことが大事なので、中澤さんはそういう面で非常に素晴らしい体験をされたんじゃないかなと思います。

次に東京学芸大学です。先程、吉澤さんから出てました、ストレスの耐性、精神的・社会的の重圧に対応できる力をどう育てたらいいのかについてです。へき地・複式の小規模校は人数が少ないのでとかく与えすぎ、過干渉になりがちなので子どもには適度な壁を作ってあげる、あえて不十分な環境を与える。そしてその壁を乗り越えた時に評価してあげる。そういうある程度のストレスを作ってあげないと、子どもってなかなか伸びていかないんじゃないかなと思います。ですから、子どもが可愛い、一緒にいたいと思う一方で、少し突き放して、適度な困難を与えることも必要です。

続いて松下さん。凄く感銘を受けていましたね。何故あれだけ感動したかということ、実体験を通して現実と向き合ったからだと思います。教育は綺麗ごとですませられることだけではありません。貧困もあるし、おっしやっようにクリスマス知らない子もいる。子どもをとりまく現実と向き合ったことにより、本当に守ろうっていう気になったんだと思います。ですから、これからも現実から目を背けないで、どんどん現実社会と関わり繋がりを持って頂ければと思っています。

古関さんです。全教員が全生徒を見守る「共育」の視点が素晴しかったです。ただし、そこに1つ必要なのは、先生方全員の共通した「考え方」です。皆で見守るのはいいんですけども、皆さんの教え方のベクトルが全然違うところに向かっていったら駄目なので、方針だとか情報を共有することが大切です。これがへき地・小規模校にはやりやすいことでもあります。また、全国の各地の良さを体験することで、全国的視野が広がりますので良いものを見て、触れて、これからも頑張ってもらいたいと思っています。

続いて中澤さんです。サークルとしての活動についても実践経験が非常に重要だと思います。この自主的な活動は大いにやって頂きたいと思っています。学校のカリキュラムとして組まれるのもいいと思います。このスライドは国研のデータです。上の方をご覧ください。赤で示したところは、校内研修、校外研修、自主研修の有益度（役に立ったか）ということです。自分で進んでやった自主研修数値が高いのです。その下を見て下さい。自主的なサークル、民間の

研究団体、教育に関する専門書籍、先進校の視察の有益度がありますが、トップは自主的なサークルの研修です。つまり、自分達で何か行動を起こした時が一番効果があるということです。どうか参考にして頂ければと思います。

愛知教育大学です。地域教材のことについて、5点のポイントと意義をちゃんと押さえてから計画を作っていることが素晴らしいと思いました。地域教材の活用については、現地へ赴いて調査をすると、教師自身が地域を理解して、感動を与えたい、そんな良さもあるかと思います。ただし、配慮しなければならないのは、何を身に付けさせたいかということをおさえること。また、発達段階に合わせた計画であるということ。これが今、学習指導要領の中で言われてます、目標を踏まえ、実態に応じて計画を作成実施、改善し、カリキュラムを磨いていく、「カリキュラムマネジメント」の考え方の基本であります。また、キーワードとして1つ心に響いたのが、地域貢献という言葉です。子どもが地域貢献することも大事ですけども、先生も地域貢献するという姿勢が大事であると思って聞いておりました。

和歌山大学です。山下さん。若い先生方は、目の前の子どもをどうしようかということで、精一杯です。若い頃はそれでいいと思います。ただし、経験を積むに従って全体を俯瞰する力、具体的には全学年を見る力も大事にしてほしいと思います。つまり、ミクロとマクロの視点です。続いて、学校と自宅での児童の違いを実感したと発表されましたが、先生方が見ている子どもの姿というのは、ほんの一面です。365日のうち学校で過ごす時間は、約2割なんです。子どもの生活のほとんどが家庭や地域なんです。教師は、子どもの一部しか見ていないことを意識しておくこと必要です。

最後になります。学んだことを他学年に教えるということが主体的・対応的に深い学びの、ヒントになる視点だったと思います。また、異学年交流の意義もきちんと整理して下さいました。上学年は自己有用感を持ち、下学年はロールモデルを目の当たりにするということがあります。間接指導ってどうしたらいいかという話が出てました。これはまさに全教職員の連携だと思えます。間接指導とか学習のルールとか、学び方っていうのは、1年生から6年生まで全部の教室である程度統一するべきだと思います。そうすることで学年が上がるにしたがって子ども達も慣れてくるし、学習もスムーズにいく。先生が代わるごとにやり方が変わっていたら、子ども達も悩むわけです。ですから、先生方が連携して学校全体で規律だとかルールを統一していくことが大事ではないかなと思っています。

以上でございます。まだまだよいところがたくさんあり申し上げたいのですが、今日のところはこれぐらいで止めておきます。皆様方、本当に今日はお疲れ様でした。素晴らしい発表をありがとうございました。またHATTOプロジェクトは本当に素晴らしい企画だと思いますので、今後も続けて頂ければと思います。皆様方の益々のご活躍を祈念し

て、終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

総合司会：戸田

中澤様、報告者1人1人に丁寧に講評頂きましてありがとうございました。

さて、皆様のご協力によりまして、ここまでほぼ時間通りにプログラムを進めることが出来ました。改めまして、長時間ご参加頂きましたことをお礼を申し上げます。

閉会にあたりまして、ご挨拶を致します。閉会の挨拶は蛭田眞一、北海道教育大学副学長、学校・地域教育研究支援センター長より、ご挨拶を申し上げます。

閉会挨拶

蛭田 眞一

(北海道教育大学 学校・地域教育研究支援センター長)



皆様、こんにちは。今紹介頂きました、学校・地域教育研究支援センターのセンター長を務めております。私からのフォーラムに参加して、感じて思ったことを2つか3つ程お話しして、挨拶に変えたいと思います。

1つは素晴らしい発表をして頂き、非常に嬉しく思いました。最近若い人が素晴らしいことをすると、何となく嬉しくてしょうがなくなる、そういう歳にもなりましたが、本当に良かったなと思います。それは皆さんの意識が高いということもあります。それから、へき地・小規模校実習を体験したこと、色んな視点を自ら課題として見つけて、それに対してアプローチをするという、その姿っていうのは、やっぱり目的・課題がなきゃ出来ない、優秀な学生達が集まったのかなというふうにも思ったりしました。

また一方で、へき地教育を体験すると、どんな学生でも教育の本質のようなことを考えざるを得ない、それがへき地教育という気もしました。子どもに寄り添うだとか、或いは寄り添い方、どう寄り添ったらいいのかとか、色んな教育の根本的なところの課題っていうのをへき地・小規模校教育を体験すると、誰もがそういう意識を持つということです。その意味では、私はへき地教育を支援する立場にありますので、その意味ではへき地教育は非常に重要なことだ、ってことを、改めて確認したところです。実は、色んな

形で支援したいなというふうに思った次第です。

後は、こういうフォーラムは、参加者は色んなお土産を持って帰ることになるとは思いますけども、こういう会合に参加した方は、必ず終わりではなくて、これが次の活動の出発点になるんだと、そういうことが必要なと思います。そういうことが叶うようなフォーラムかなというふうに思います。私は今、ずっとお話しましたが、一層、へき地教育について色々支援したいなという気持ちになりました。学生の皆さんも改めて教師になりたいという方、けっこういましたので、そういう意味でこの分野の教育っていうのは、色んなことを一般の学生も含めて、知らせてくれるものだなというふうに思ったところです。

最後に、新しいメンバーの和歌山大学さんも加わったということで、この発表までには、相当なエネルギーが色々な参加された方の中で使われたというもので、その成果が出たかということで、非常に成功したフォーラムだと私自身思っております。ご苦労様でした。お疲れ様でした。ありがとうございました。以上です。

総合司会：戸田

本当に長時間にわたりご参加を頂きまして、ありがとうございました。以上を持ちまして、平成28年度、へき地・小規模校教育フォーラムを終了致します。どうもありがとうございました。